月刊ナイトバグ　Perfect Bugs Blossom型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2011年
4月号
小虫は桜花に閉ざされた辺境で、
弾幕の結界を見付ける事が出来るか…
特集
東方妖々夢
読切り作品
SS ：○（仮名）/くろと
如月翔/もやし
漫画：羅外/斑/非常識
preudenano/
連載作品
SS ：悠奈
漫画：草加あおい/
クロツク/怒羅悪

月刊ナイトバグ　2011年4月号

coverdesign　小崎

目次　……　3p

リグルは人気者　黒ストスキー　……　2p

月別テーマ「東方妖々夢」　……　4p～45p　扉絵：みなも

-テーマイラスト　……　5p～8p
（貴キ/ADDA/キッカ/蛍光流動）

-はしれリグル（或いは春雪異変異聞）　○（仮名）　……　9p～18p

-早とちり勘違い　如月翔　……　19p～21p

-無題　非常識　……　22p～24p

-おいしいしらたま　斑　……　25p～32p

-東方茶湾虫　クロツク　……　33p～38p

-リグル妖々を行く　preludenano　……　39p～41p

-ほたりぐる～東方妖々夢～　怒羅悪　……　42p～43p

-無題　草加あおい　……　44p～45p

蟲カゴ～Compensation to fantasy～　悠奈　……　46p～52p

旅人　くろと　……　53p～54p

Ash like snow (前)　もやし　……　55p～57p

イラスト　……　58p～59p
（残虐非道の貴公子/夜騎士）

リグルーペ　羅外　……　60p

無題　言示弄　……　61p

うなぎ

漫画、自由作品、表1～表4　作者コメント　……　63p

4月号テーマ
東方妖々夢
『なかよしさん』　みなも
妖々夢のキャラ誰描くかな悩んだ結果、
虹川姉妹にしたけど結論帽子描けなかった。

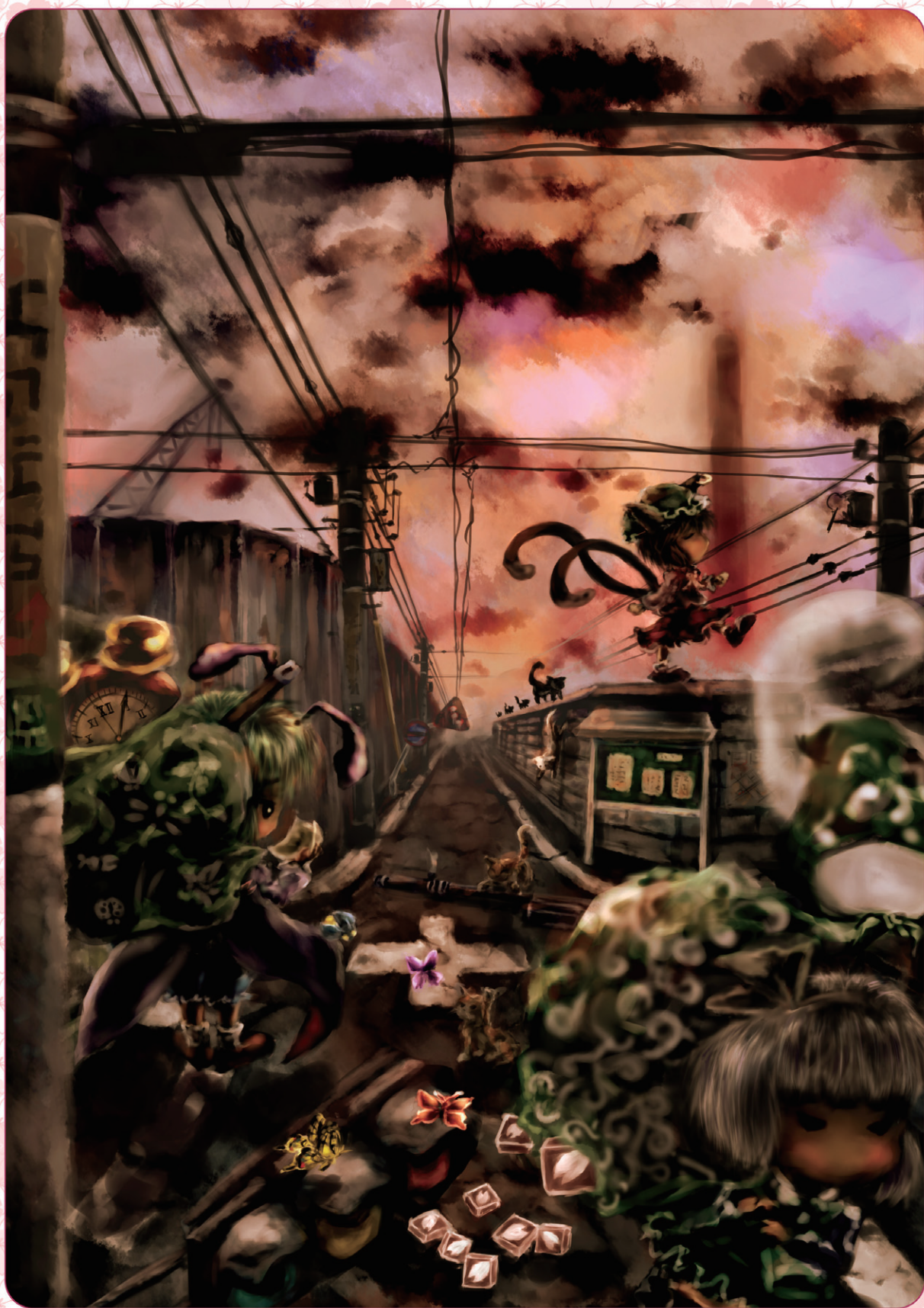
『 バカルテットとよーよーむ 』　貴キ

早く皆が笑い合える日常を取り戻せますように。

『STAGE1』　キッカ

魔理沙さん大暴れ。ぽけーっと見ているリグルさん。

『ぐるぽ！』　ADDA

頑張って！遠くから応援していますよ。日本のリグリエイター皆さんが無事になるようにー

『マヨイガの迷い道』　蛍光流動

「マヨイガ周辺、春を奪ってったのがいるので、この時期でも寒いです。神社の巫女、魔法店主、紅い館の手品師あたりに期待しましょう。結界の大妖怪が起きそうにないので、しばし蟲の知らせサービスはお休みします。」
地震で被災された方が、一日でも早く復興し春を迎えられるようになることをお祈りしています。

はしれリグル（或いは春雪異変異聞）

著者：〇（仮名）

冬来たりなば、春遠からじ。

――『西風に寄せる歌』

‡　‡

しばらく前の、四月のある日。

寝たら死ぬぞと勇ましく、雀と蛍が冬空をゆく。さむいを通り越して猛烈に痛い寒気。薄い空気、何度も何度も雲の層を抜けて。

目指すははるか、空の上。

「ごめんリグル、私ちょっと限界かも……」

「わあっ！　駄目駄目、寝たら駄目！」

上空二里ほど、並みの妖怪が好きこのんで飛ぶような高さをはるか通り越している。

いくら妖怪が頑丈だといえ、飛ぶが得意の雀と蛍とはいえ、落下した日には大惨事だ。

リグルはミスティアの手を強く引く。

この二匹、知り合ったのがつい先ほど。

それがどうして、こんな命をあずけあう、大ハードな状況に追い込まれているのか。

そもそもの原因は、冬が長すぎた事だ。

‡　‡

「おおい、起きるなあーっ！」

喉も枯れよ、せいいっぱい声を張り上げて、うすい雲の垂れこめた空を西東に飛ぶ、飛ぶ。

普通は逆だろう、というセリフなのだけど、それでもリグルは大まじめだった。

綿入りを幾重にも羽織って、毛織り帽子の頭のてっぺんから、毛糸の靴下の足の先まで、手袋マフラー完全武装。まるまると着ぶくれ。

「起きちゃだめだ、死んじゃうぞーっ！」

息を吐き出しきって、深呼吸。あかい頬。さてもうひと頑張り、と気張ったところで、それは大きなくしゃみが出た。

「うう……」

妖怪、風邪ひかない。だが、それでも辛い。辛いものは辛い。

リグルは蛍。夏の虫。飛んで火に入るのもイヤだけれど、こんな寒空の下を飛ぶなんて普通はない。普通ではない。

ハンカチで鼻の下を拭っていると、鼻の頭にちらり、えらく冷たいものが触れた。すぐ溶けて流れ落ちるのを慌ててぬぐう。首筋に流れたらたまったものじゃない。

「ああもう！　どうなってるのさ、今年は」

何度目になるかわからないひとり言。けれど、ぼやきたくもなるというもの。

また、雪だ。

立春啓蟄とうに行き過ぎて、四月の真ん中超えようという時期の大雪だ。

うすい雲のした、広がる幻想郷の風景は、

一面の雪景色。
　どこかのとぼけた虫が、うっかり冬眠から顔を出そうものなら、あっという間にコロリ。あんまりなすさまじい寒さ。
　それも、一日や二日では終わっていない。もう半月近くも、飛び回って叫んでいる。その甲斐があってなのか、それとも蟲たちの生きることへの必死さが食い止めているのか、木のうろの下に凍え死んだ虫がひとやまに、なんていう景色は見ないで済んでいるけれど。
　とうに、異常気象どころの騒ぎではない。こんな状況を指すのにうってつけの言葉がこの幻想郷にはあって、リグルも知っていた。
　マフラーをかきあわす。見上げる春の冬空、陽の光わずかに通し、それでもひたすらに寒々しく曇っている。
　小さく震えて、吐く息が白い。
「やっぱり。異変なのかな」
　どこかの大妖怪が、一発名を挙げようかと引き起す天変地異。有象無象を引き連れて、幻想郷全土を覆うことすらある大災厄。
　去年はたしか、湖の吸血鬼の気まぐれで、森と言わず里と言わず、赤い霧に包まれた。確か件の吸血鬼、幻想郷へと来た直後にも、大物妖怪を相手にひと暴れしていたはずだ。もっともそういった、面子だの強さだのにはあまり縁のないリグルにすれば、身近でない大物どうしの大立ち回りは実感がない。
　ともあれ、春になっても真冬というのは、おあつらえむけでいかにも異変らしい。
　異変らしくはあるけれど、違和感がある。
　今日も吹雪きだす空。
　かえりみちを急いで飛びながら、リグルは慣れない考え事に沈む。何がおかしいのか。
　考えながら森の上を通りがかり、木々の間、半ば雪に埋もれ転がる、獣の姿を見た。
　死んでいる。
　気付けば、言葉にするのは簡単だった。
「……そうだよね。死んじゃうよね」
　幻想郷は、言ってしまえば温い。残酷さはあるが、それはたとえば不慮の事故で誰かが死んでも、他人にそれを押し付けられない、という冷徹さであったり、妖怪が人を食う、という事実そのものだったりする。
　無闇に殺してよい、という無惨さではない。
　去年の異変にしても、長続きすれば不作で人死にも出たかもしれないが、別に霧自体が毒を帯びているだの、そういう話はなかった。
　これほど厳しい冬が続けば、大勢が死ぬ。妖怪はせいぜい寒いと不平を言う程でも、里の人も森の獣も、もちろん虫たちだって、容赦なく命を落としていくことだろう。
　異変というには、無邪気さが足りない。
　そもそも殺す気でやっているか、それとも異変の犯人が、まるで死人か何かのように、生きていることへ極端に無頓着なのか。
　どちらにせよ、リグルは大きく身震いをした。寒気以上にうそ寒いものを感じて。
　これがもし異変とするなら、解決するのは博麗神社の仕事の筈である。妖怪が人を襲い、巫女が退治する。それが決まり事だ。
　けれどもう、この長すぎる冬は半月以上。冬の終わりごろから続いているなら、もっと長い事、放置されていることになる。
　あなぐらまがいの家、厚い木のドアを押し開け大慌てで閉じて、あかあかと燃えている暖炉の前へすっかり濡れた上着とマフラーをひっかけ、ついでにお湯を一杯飲んでから、リグルは深々とため息をついた。
　このまま放ってはおけない。
「妖怪が巫女に助けを求めちゃいけないって、きまりはないよね」
　こんな異変を起こすような大妖怪、とても勝てるとは思えない。けれど、相手の正体を訴え出れば、まさか巫女だって（いい加減な性格だというわさは聞くけれど）動かないわけにもいかないはずだ。
　二着しかない防寒着の、二着目を長持から

引っ張り出す。
古道具屋で昔買った、揉むだけで熱くなる使い捨ての懐炉を、懐へ放り込む。
思い立ったが吉日、有言実行即断即決。
とても、じっとしてはいられなくなった。

‡　‡

出立してから半刻もたたないうちに。
「ひええええっ！」
英雄的な決意、決心、あるいは発奮、存分に後悔するハメになっていたリグルである。
ロケーションは湖上空。
飛び交うのは雹というにも大きく長く鋭く不格好すぎる、とんでもない氷の塊。
必死で避け、妖力弾で砕き、それに紛れて突っ込んでくるテンションの高すぎる妖精をいなしてかわして。
悪くない思い付きだと思ったのだ、最初は。
冬が長引いているなら、冬が長引いて喜ぶやつが黒幕をやってるんじゃないのかと。
だったら冬の妖怪が出張っているところをあたればいいんじゃないのかと。
普段頼りにしている虫たちの情報は、当然使えなかったけれど、数少ない友人（妖怪）に聞きまわったら、あっさりと割れた。
盛大に凍った湖に、雪女が陣取っている。
これだ、と思った。
思って直行した結果が、この有様。
身の程知らずめ消えよ、的な展開である。
テンションごりごりで、ほとんど戦場のような状況、一寸の虫はあまりに無力だった。
いや。
戦場のような。というよりも。
氷の嵐を大きく避けて、リグルは気付く。
猛烈な勢いの嵐は、ゆっくりと、しかし、自然としては早すぎる速度で移動している。
よく見れば、飛んできているモノたちは、氷塊というより氷弾のようにも見えた。
弾幕だ。
「……誰か、戦ってる？」
神社の巫女だろうか。それなら、リグルは無駄足だったことになる。
それはそれで、まあいいのだけれど。
さらりと帰るに帰れず、恐る恐る氷の嵐へ再アプローチしたリグルの目の前に、
「グェーッ！」
「うわあっ！？」
カエルの踏み潰されるような悲鳴とともに、弾き出されてきたものがあった。
反射的に受け止めると大層冷たく、さらに反射的に投げ捨てようとすると手袋の表面にびっしり降りた霜でいきなり凍り付いて。
「ちくしょーあたいは負けてないぞーっ！　このメイドーっ！　戻ってきて戦えーっ！」
「暴れないで暴れないで、ていうか、私から離れてよっ？」
それはリグルよりも一回り小さな人型の、氷の羽根を生やしたどうやら妖精だった。
そういえば、この湖、いつもは氷の妖精の根城になっているという噂だった気がした。
これがそうだろうか。というかそうだろう。だってこんなに極悪に冷たい。
「あ！　あんたもあのメイドの仲間？」
「違う！　違うから離れて！」
「違うの？　違うならしょうがないなあ」
ばりばりと音を立てて身をひっぺがす氷の妖精。多少手袋の毛糸が持って行かれたのに気付く。勇気を出して人里で買ったのに。
「ああ、こんなにごっそり……あれ？」
赤い毛糸が張り付いている妖精の服、よく見ればわりとぼろけていて、ついさっきまで誰かと撃ちあいでもしていたような様子だ。
些細なことで泣きそうな気持を無視して、リグルはなんとか質問をひねり出した。
「妖精の人さ。あれ、あなたがやってるの？」
「チルノ！」
一瞬ぽかんとする。
「は？」
「あたいはチルノって名前があるの。あんたじゃない。あんたは？」
「そっちだって、あんた呼ばわりじゃない」
「あんたの名前知らないもん！」
なんかおかしいが、それはそうだ。
「私はリグルでいいよ。それで、あの嵐は」
「あたいじゃないよ。なんか、冬っぽい妖

怪がやってるんだ。リグルも勝負しに来たの？」
　それならあたいから倒していけ！　とか、そんなことを言い出しそうな勢いの氷精を、慌てて手で制する。
「違う違う！」
「じゃあ何しに来たのさ？」
「……調べもの、かな？」
　まさか、巫女にタレ込むために異変の調査をしています、とは言えない。
「その冬っぽい人のとこ、巫女が来てるの？」
「違うよ。なんかメイド。あそこの屋敷の」
　このへんで屋敷と言えば、一軒しかない。
　湖ど真ん中に浮かぶ吸血鬼の館だ。
「そうなんだ……」
「そうだよ。寒いのがヤだって。迷惑よね。あたい、これくらいがちょうどいいのに」
「ははあ」
　要するに、冬の妖怪が居すわっている湖の上空は格別に寒く、それに怒った近隣住民が乗り出してきたという感じだろうか。
　それは氷精には居心地もいいだろうが。

　遠くで弾幕の交差する甲高い音。

「今年の冬長くしたのって、その冬の人？」
「え？　冬、長くないじゃないさ。リグル、何言ってんの？」
「え？」
　なにそれこわい。
「いや、だって今も冬じゃない」
「冬じゃないよ。春じゃないだけだよ」
「え？」
　リグルの頭がクエスチョンマークで埋まる。
　何言ってんだこの妖精。
「だって、春じゃなかったら冬じゃない」
「夏だって秋だってあるよ」
「いや、それはそうだけど」
　そういう問題でもない気がする。今の気候はどう見ても夏でも秋でもないし。
「春が来てないから、冬っぽいだけじゃん。わかんない？　リグル、もしかして馬鹿？」
「なんか凄く失礼な事言われた気がする！」
　いや、確かにあまり頭良くないけど。
　それでもなんだか、とても致命的な罵倒を受けたような気がした。
　そのままでいるのが物凄く業腹だったので、必死で考える。

　冬が長いんじゃなくて、春が来ていない。
　妖精は馬鹿だけども、妖怪より強く自然と繋がっていたりすると聞いた気がする。
　特に氷精ともなれば、季節には敏感だろう。
　なら、チルノの言葉のそのわけは。

「えっと。冬を長くしてるんじゃあなくて、春が来るのを邪魔してるやつがいる？」
「そうなんじゃない？　リリー見てないし。春先のあいつ、面白いから好きなんだけど。ねえリグル、リリーどっかで見てない？」
「いや、わからないなあ」
　リリーは確か、春告精のことだったはず。春が来るのと同時にやってくる。春の気配にひかれてやってきて、幻想郷を春にする。
「そっかあ。うーん。残念。ねえ、リグル、あたいと遊んでかない？」
　負けてどうとかと言ってたのをすぽーんと忘れた様子で言う氷精。ああこれ良い奴だなと了解しつつ、リグルは首を横に振る。
「ごめん、急いでるから。あとでまた」
「そう。じゃあ、約束ね！」
　この寒空の下、テンション高い氷精と弾幕ごっこなぞした日には、それこそ冬眠送りだ。
　それに。
「ありがとねチルノ。なんとなくわかった」
「そう？　お礼なら後でいいよ！」
　えへんと胸を張る氷精。うん、確かに恩ができたなあと苦笑するリグル。
　でも、ヒントをもらえたのは本当だし。

　春が来るのを邪魔しているやつがいる。
　春が来なければみんな大変なことになる。
　春は、みんなが欲しがるものだ。
　みんなが欲しがるものが、どこにもない。
　それなら。

「……誰かが独り占めしてるんだ。きっと」
　そんなことが、どうやったらできるのかはわからないけど。
　なら黒幕は、春っぽい所にいるに違いない。
「よし！」
「よし！　よくわかんないけど頑張れ！」
「ありがと！　それじゃね！」
　なんだか、いい友達になれそうな気がする。
　リグルはまだ響く弾幕の音を背に、氷の湖をあとにする。

‡　‡

　博麗神社裏、山の中。行く人なくすっかり雪に埋もれた参道。
　春の気配はまるで見えない。
「……もしやここかと、思ったんだけどなあ」
　今の幻想郷、春っぽい人と言えば巫女さんが筆頭である。解決のために動かないのも、もしかすると、と思ったのだけれど。
　事態が解決しなければ、解決する側が何か企んでいると思う。人、それを陰謀論という。
　もちろんのこと、大外れだったわけだが。
「でも、もう、行くところ残ってないよね」
　寒空を一人飛べば、ひとりごとも増える。
　勝負を避けて、逃げて逃げて逃げまくり、幻想郷の隅からすみまで。一気に駆け回ったリグルだった。最後まで避けていたこの神社以外、全ての場所が雪ノ下に埋まっていた。
　ちらりと春らしい所すら、どこにもない。そういう意味だと、チルノのアドバイスは、当を射ていたような気がする。
　それにしたって、春がどこへいったのか、わからなければ意味もないわけで。
　神社からは炊煙が上がっている。
　巫女在宅中。当分出る気もなさそうだ。
　リグルは嘆息する。
「やっぱり、もう少し聞き込みかな……」
　でも、いったいどこへ？
　うんうん唸り、ない頭を絞って、寒い中で知恵熱を出しそうになる。ので、早々に思考放棄する。
　考えるより、手近な相手に聞いてみよう。
　さて誰に、と吹雪に目を凝らすと、夕刻の雪原に、大きな黒い塊が目に入った。
　はてアレは何だろう。と考えること暫し、周囲にちらちらとオレンジの光が漏れるのを見てようやく気付いた。
　どうやら知り合いだ。
　会話相手を見つけたと、リグルは急降下。
「ルーミア？　またこんな危ないとこで」
　神社裏という、妖怪にとって危険極まる、巫女に御幣を向けられるたびに壱円貰えば、御殿が建つような環境が根城の変わり者だ。
　幻想郷に迷い込む人間を狙っているのだ、なんていう噂もあるが、気楽な様子を見るとあまり信ぴょう性はない気がする。
　周囲はいつも、妖怪ですら見通せないほど真っ暗で、暗くないと商売あがったりの蛍と相性がよく、リグルとは付き合いがあった。
　その闇の中で火を焚くとこんな風になる。
「起きてる？」
　そういえば家ないんだった。呼んであげるべきだったかなあ。
　などと、考えられる程度の間があって。
「ああ、ごめんごめん」
　闇から顔を出す、変わった耳の妖怪。
　ひらひら衣装、頭にのった焦茶の帽子。
　もちろんルーミアではない。
「あれ？」
「あー。リグル、入ってよー。中の方が落ち着くから」
　追いかけて、聞きなれたルーミアの声。
　闇の中は不思議と、表より暖かかった。
　夏場は涼しかったりするあたり、実はこのルーミアの暗闇、かなりの居住性があるのでないのか。
「リグル、冬眠してなかったの」
「だってもう、暦じゃ春だもん……誰？」
　闇の中には先客二人。当然のルーミアと、

ひらひら衣装の変わった耳の、全身を見ると背中に茶色い翼も背負った妖怪娘。
「あ。夜雀のミスティアよ。よろしく」
　手を差し出されたのでとりあえず握手。
「ええっと。私は、蛍のリグルだよ。夜雀、商売になるのこの季節？」
　夜出歩く人を、鳥目にする妖怪だっけか。夜道どころか昼すら人の行き来がない厳寒、何ができるかとも思えない。
「ならないのよ。だからルーミアに、相談にのってもらってたのね」
「相談？」
　友達だったのか。思ったより交友が広い。
　確かに、夜雀と闇の取り合わせは、蛍と闇の取り合わせと同じくらいありえそうだ。
「そうそう。相談相談するならそうだん♪」
　珍妙な節をつけて口ずさむミスティアに、ちょっと苦笑するリグル。
「何の相談？　食糧分けてほしいとか？」
「コンビ組まないかってお誘い」
「……脅かす相手がいないんじゃ？」
　人気の絶えた雪まみれの世界である。
「脅かすわけじゃないよ。歌うの。その演出っぽいもの」
「真暗にしても、演出効果ないんじゃ……」
「そうなのよねー」
「そうなのかー」
　妖怪ですら見通しにくい闇妖の暗闇の中、ふたりが困ったように伸びをしたのがなんとなく伺えた。
「競争相手が強力だから、考えたんだけど」
「競争って」
「ほら、これ」
　何やらぺらぺらしたものを手渡されるが、まるで見えない。妖力で蛍光の珠をつくって目を凝らすと、どうやら刷り物に見えた。
「白玉楼御花見芸人募集？」
「そうよ。なんかいいところの家っぽいし、歌うたいとしては、ほっておけないわけよ。巷で評判のプリズムリバー楽団も出るって話だし……」
「へえ。この寒いのに、そっちも大変だね」
　って、ちょっと待て。
　御花見？
「お花見って、桜？」
「梅かもねー」
「さーくら、さくらー♪　お花見で宴会っていったら、やっぱり桜よ桜。夜桜」
「…………」
　まあ、梅でも桜でもいい。
　リグルはじっと刷り物を見つめる。
　幻想郷西の端、雲の上から、白玉楼。聞いたこともない場所だった。怪しい。
　リグルが駆け足で見て回ったあちらこちら、どこも地上だった関係上（当たり前だ）、雲の上なんていうのはノーチェック。
「ねえミスティア。ここ行くんだよね」
「あ。リグルも来てよ？」
「へ？」
　先手を取られてぽかんとする。
「夜桜夜桜、何見て光る♪　その出した光、イエスだね！」
「ああ。これ」
　蛍妖怪だけあって、蛍火を操るのは得意なリグルだ。虫がいなくてもこれ位はできる。
「友達のよしみで！」
「リグル、行きたいんじゃないの？」
　ひょい、と姿勢を下げて見上げるルーミア。言われるまでもなくその通りで。
「わたしは、あんまり役に立てないけどー。ひかりものなら、みんな喜ぶんじゃない？」
「ばっちりよ、ばっちり！」
「うぅん」
　なんだか予想もしなかった需要に合致した。悩むが確かに渡りに船、芸人として行くなら門前払いされる可能性もないだろうし。
「ええと、いいならお願いしていい？」
「もちろんですともお嬢様♪　よろしく！」
「成立だね。気を付けてね、外寒いよー」
　そうかな、と思って少し闇から顔を出す。てきめんの凍てつく某風が痛い。
　慌てて引っ込む。
「……そういえば風もない。ルーミア、実はけっこう凄いことやってない？」
「いつも通りだよ？」
　極限状況になると、普段つるんでる相手の違う顔が見えたりするもんだなあ。と痛感しリグル、色々聞くのは後にしようと判断。
「それじゃ、善は急げってことで」
「走れ走れ、私たち♪　ってね」

「いってらっしゃーい」
ミスティアとリグル、手と手を取り合って闇の中から出る。
あたりじゅうは吹雪の真っただ中、しかしそこはふたりとも動物変化的な妖怪、方位はなんとなく感覚でわかる。
吹雪に霞む視界に、頷きあって飛び立つ。
目指すは幻想郷、西の果て、空の上。

意気揚々と旅立ちは、したものの――。

‡　‡

上空二里は、雲海のただ中。

「ごめんリグル、私ちょっと限界かも……」
「わあっ！　駄目駄目、寝たら駄目！」
つまるところ、こうなったわけである。
お花見という団子に釣られて、突貫してはみたが、雲の下も雲の中も雪まみれ、僅かに飛ぶ間に体という体は霜まみれ。頑丈な妖怪でもめげたくなるような有様。
氷まみれの襤褸布のようになり、それでも衣装の入った（らしい）頭陀袋を後生大事にぶら下げたミスティアを、さらに吊り上げるリグルは必死だ。
ともかく上へ、上へ。雲の上へ。
太陽が直接当たるところまで出られれば、この凄まじい寒さだってなんとかなる。
実は雲の上というのは、空気の薄くて寒いのが普通だというのを、リグルは知らない。
知らぬから、虚仮の一念、必死で飛んだ。
「あと少しだから！　あと少しだから！」
「うーんもうおひねりいらないよう」
「そういうひねりはいらないよっ！？」
もう駄目かもわからん、いやいやと諦めを押し殺して、さらに加速。
雲と雹と霜の壁が薄くなり、
光が近づいて、

一気に視界が開けた。

あらい息をのみ込んで、落ちつかせて。
「……わぁ」
感嘆がもれた。
「あれ。……ここ、天国？」
「いや、死んでないから！　雲の上だよ！」
天国って雲の上だっけか、まあ生きてる。
けれど、ミスティアの感想も頷けた。
暖かい。
からだにまとわりついていた寒気と霜は、とけるように消えていく。
青空と、白いはずの雲も、なぜか暖色の光に輝いているように見えた。
生き物の姿や声こそないけれど、これは。
「春だよね」
「はーるがきーたー、はーるがきーたー♪
……お花見にもばっちり期待できそうね！」
そう。まさに春だった。
雪に埋もれた地上とは比較にならないほど、あきらかに、不自然なほどに春だった。
なるほど、とリグルは納得する。
これは確かに、春泥棒がいたんだ。
屋敷の中を見るまでもなく、これはもう、タレ込んで大丈夫なレベルだろう。
「ね。あのさ」
ミスティアには悪いけど、引き返そうかと思ったその矢先。
まずは強烈な春風が来た。
続いて、声。

「春ですよ――――――！」

「へ？」

そして、猛烈な速度で大気の弾ける音。
視界を埋め尽くすほどの量の楔弾。

「ひ、ひえぇえっ!?」
　雲の中を突っ切って萎えかけた翅翼に気合注入、一気に上昇してどうにか避ける。
「ミスティア、だだ大丈夫?」
「あーっ!　私の衣装―っ!」
　どうにか無事なようで何よりだ。

　にしてもスペルカード宣言なしでの急襲、弾幕ごっこという話ではない。
　テンションが上がりまくって暴れている、という塩梅だ。
　相手がだれかと目を凝らす。
　春霞が漂う（この時点で何かがオカシイ）雲の上、その向こう側に相手がいた。
　白い衣装に白いとんがり帽子、赤い意匠。
「春告精……こんなとこにいたんだ」
　満面の笑顔で小躍りしそうな勢い。細かくふるふるとふるえているのは、エネルギーをもてあましているかのよう。
　春先に近づくと危ないとは言われていたが、これは例年より数段荒ぶっている気がする。
「ちょっとあなた、人の大事な商売道具に、なんてことしてくれるのよ!」
「わあ!　待ってミスティア、おちつい」

「春ですよ――――――――!」
「ぎゃーっ!」

　連続する空気の破裂音。
　ミスティアの首根っこを引っ掴んで加速、必死で距離を稼ぎ拡散した楔弾を掻い潜る。
「危ない!　危ないってば!」
「そんなこといっても、こんなぐしょ濡れで、さすがに芸の披露とかできないわよ!」
「そりゃ残念だけど……」
　リグルとしてはありがたい話ではある。なにしろ、遠慮なく戻ろうと言える。
「リグル、替えの服とか持ってない?」
「いやあ、食糧とかは持ってきているけど。流石に衣装になるような着替えとかは……。それよりさ。ミスティア」
　準備もアレだし出直さない?
　と、言い出そうとしたところで。
「……ねえ。なんかこっち見てる?」
「見てる。すごく見てる」
　もはや不吉な予感を孕んでいるようにしか見えない笑顔が、二人を捉えるのが判った。

　行き会う人に春を伝えるのが春告精。
　そしてこの高い空の上、目につくひとは、リグルとミスティアしかいないわけで。

「春ですよ」
　じりじりと間合いが詰まる。
「逃げない?」
「逃げようか」
　話が通じない相手、叩きのめしてどうにかしようにも、完全に勢いに呑まれている。
　目をかわして頷きあう。

　満面の笑みが爆発する。

「春ですよ――!」

　爆散するように広がる空気の破裂音。

　もうほとんど言葉にならない悲鳴をあげて、妖怪二人は全速力で逃げ出した。

　単純だがおそろしく密度の高い楔弾幕が、すくめた首のすぐ横を通り過ぎていく。
　当たったら痛いでは済まない。
「ひえええええっ!」
　右へ左へ。上へ下へ。
　避けて避けて、はたと気づく。
　春告精は当然、春にしか出てこない。
　盗まれた春は、雲の上に集まっている。
　それならもしかして。
「ミスティア、下!」
　声を張り上げる。
「え、いいのそれで?」
「いいから!」

　息を止めてリグルは、感覚として真冬の湖にもおもえる雲海へと飛び込んだ。
　春の陽気にゆるんだ肌が、がたりと落ちた冷気に一気にしめられて引きちぎられる痛み。

もはや悲鳴にならない声すら出ず、兎に角下へ、落ちていく方向へ加速しようと試みるものの、暴風に煽られて方向が怪しい。
ああ、まずいかなと思うが今更止まらず、ミスティアは無事か、生きて帰ればこの冬がおわるかもしれないんだと思い定めて必死で触角を研ぎ澄ます。

遠く、暖かな気配が昇っていく感覚。

驚き目を凝らすと、マフラーを翻し、でも短いスカートの給仕服で寒そうなのが不釣合な少女が一人、周囲に桜の花弁を引き連れて雲の中を駆けあがっていくのが、暗い雲海の底ではっきりと目に留まった。

‡　　‡

そうして。

「……なんだかなあ、もう」

遠く近くに鳥の声。それから、リグル以外には聞こえない虫の声。
雪が解けてぬかるんだ森の小路を、沢山の気配が踏んでゆく音。
なんだかなあ。と、口に出さずもう一度。

春泥棒の大騒動は、結局、あのあとすぐに片付いた。リグルが何かする前に。
吸血鬼の館のメイドが、妨害という妨害をなぎ倒し、かすかな春という春をかき集め、白玉楼に殴り込みをかけたらしい。
そうして、盗まれた春は戻ってきた。
今、頬に当たる風は暖かく、緑の香りだ。
巫女以外が異変を解決しに出てくるとは、時代も変わったものだが。

青空に雲雀が飛んでいく。
風に乗り飛んでくるのは、桜色の花弁だ。

幻想郷はもう、すっかりと春。

「あーもう！　なんかいろいろ損した！」
腰かけた一本杉のてっぺんで、器用に体をひねってもだえる。
なんだかものすごい肩すかし。無駄足。自分は一体何やってたんだという感覚。
あー、と、もう一声叫びそうになったとき、

視界に、ひらりと蝶が入ってきた。

「……あれ」
小さな羽虫、コバエ。天道虫。そのほか、もろもろの小さな虫たちが、一本杉の回りに集まっている。
「おまえたち、どうしたの……」
雑多な声に耳を澄ます。
ひとつひとつは小さい声、種類も違うから混ざり合って聞き取りにくいけれど、意味はひとつだけだ。
「ありがとう、って？」

確かに、そう聞こえた。
すぐに飲み込めずにきょとんとして、少し考えて、それから、ようやく笑う。
ああ、自分の空回りではなかったんだと。
「こっちこそ。ありがとう、生き延びて」
あれだけのことがあった。けれど、この分なら、幻想郷の自然は大事なく回っている。
虫たちへ、色々と残酷なことを命じる必要もなく、きっとなんとかなるだろう。
それだけで、なんとなく――。

「悪くはないかなあ……」

ほう、と息をつく。

「あ♪　いたいた！　リグル、探したよ……その子たち、食べていい？」
「いきなり何言ってるのさ！　駄目だよ！」
真昼間から出歩いている夜雀にツッコミを入れる。なんでこんなところに。
「残念。それじゃ、何か食べ物持ってきてね」
「なんで？」
「お花見よ、お花見。花、華、どんな花♪」
「ああ……」
そういえば、確かにもう十分いける季節だ。
「発起人はルーミアあたり？　……誘いたい相手がいるんだけど、いいかな」
ひょんなことから世話になった氷精のことを思い浮かべながら言うと、ミスティアは勢

いよく頷いた。
「もちろん♪　私の美声を披露する相手は、多ければ多いほどいいわ」
「白玉楼、不意になっちゃったもんねえ……」
当たり前だが。
「こうなりゃ楽しめるならいいってことで♪　じゃ、よろしくね！　集合、ルーミアのねぐらのあたりで！」
「はいはい、了解」
そう言うミスティアを見送って。
春の陽気のなか、少しぼんやりとして。
ルーミアのねぐらって、神社の裏で。桜の名所って、神社しかないことに気付いて。
大丈夫なのかと思うけれど……。
「……ま、なんとかなるかな」
あのいい加減な巫女なら、大丈夫だろう。今なら、何もかも前向きになる気がするし。
とりあえず、あの氷精を誘いにゆこう。
そう決めて、リグルは一本杉を飛び立った。

（終）

【あとがき】
書きたいことがあるけれど、実力及ばずに書けないこともあります。個人的にリグルと言えば努力家のイメージがあり、妖々夢事件の裏でなら何をしていただろうと思うと、やはり無駄な努力をやってたんじゃないのかなと。あと、所謂バカルテットのつなぎ役をやってそうなのは彼女なんじゃないかなというイメージ。ついでに書いている最中に例の地震が来てしまったこともあり、それらから絞り出した結果がこのへんになります。推敲の不足やらもありますが、これが同じ夢を見られたひとたちに届くことを願ってやみません。

早とちり勘違い

著者：如月翔

「視界悪いなあ」
雪と風の舞う光景に視界を遮られ続け、溜まりに溜まった鬱憤を晴らすように溜息と共にボヤク妖怪がいた。しかし、ボヤいても吹雪は止むことなく、それどころか一層厳しい寒さで小さな体に襲いかかる。苦手である寒波に身を震わせながら、マヨヒガへと飛翔を続ける。
先程から縦横無尽に吹き抜ける風の向きは、自由気儘にころころと変わる為、目的地に無事到達出来るか不安であった。が、どうやらその心配は無用だったらしい。細めていた視界の先に民家と思わしき建物が映り、その数をぽつぽつと増やしていく。人っ子ひとり見当たらない里に降り立つ、ここまで来ればもう迷子になることもないだろう。マヨヒガなのに、迷子にならないという矛盾を気にもとめず。知り合いの待つ屋敷へと向かう。
「橙、開けてーー！」戸をドンドンと叩き、名を呼ぶ。待つこと数瞬。「今行くーー！」という、家主からの返事と廊下を走り近付く音と共に受け取る。
「お待たせ、上がって上がって」
「……なんでボロボロなの？」
今まで家の中にいたはずの橙の服は、何故か所々ボロボロになっており。まるでついさっきまで、弾幕ごっこでもしていたかのようだった。そんな仮説を立てるリグルに対し橙は、スペルカードを取り出しその通りと答える。
こんな山奥で、更に天候が荒れている状態で誰と弾幕ごっこしたのかと興味を持ったが。その言葉より早く「鍵閉めといてね」と告げ、部屋へと戻る橙の後を慌てて追いかける。風はないが冷えた廊下を渡り部屋に入ると、先客が一人トレードマークとも言える帽子を傍らに、中央に設置された炬燵へ足を投げ出して、ゆらゆらと湯気の立つお茶を啜っていた。
その様子を見たからか冷え切った体が熱を求め引き寄せられるように、吸い込まれるようにその炬燵へと滑り込む。
「いらっしゃい、リグルも来たんだね」
「そりゃあ寒いもん。はあ、暖かくて幸せ……」
「外寒いからね、風も強いし遅くなるのも分かるよ」
その言葉を聞いて、今この部屋にいないチルノ、ルーミアの二人のことを思い出す。彼女等はまだ来ていないようだ。チルノは、この時期部屋に来るたび「熱い」と、文句を言うからともかく。ルーミアはどうなのだろうか、日差しを嫌っているが。満更でもない様子で過ごしているからよく分からない。
ただ特に何かをするつもりはないため、来ても来なくてもどちらでもいい。リグルは、自分の家に居ても寒い。という分かりやすい理由で、外が吹雪いている中マヨヒガを訪ね。ミスティアも同じような理由で、雪を帽子や翼にのせながらやってきた。そんな二人に橙

は、暖かい場所という自身の住処を理解して、家に上げる。一見優しそうに見えるが、実のところ何も考えていないだけなのかしれない。
「お茶飲む?」机の上に置かれた急須を手にし、橙が話しかける。
「飲む。……ん? っと」
炬燵から出ないまま身を捻り、これでもかと手を伸ばしてお盆に置かれた茶碗を取り差し出す。
「行儀悪いなあ」
みかんを剥きながら、ミスティアが呟く。
「別にいいじゃない。ところで橙、何時もより遠くに置いたでしょ」
「あ、分かった? 届かないと思ったんだけどなあ」
お茶を淹れながらケラケラ笑う。
「性格悪いなあ」
「別にいいじゃない。次からは気をつけるし」
「信用出来ないなあ」
受け取ったお茶を飲みながら苦笑する。
それきり互いにみかん取って、や投げていい?といった、会話を繰り返し、時間を消費していく。しばらくそんなやり取りを行っていたが、段々飽きてきたのか何か他に面白い物ないか。と、寝転がった姿のまま視線を動かし探し始めたその時。
戸を叩く音が響き、各々は起き上がり向かい合う。
無言のまま頷き合い、手を握り同時に声をあげた。
「「ジャンケン――――」」
「……いらっしゃい」
「あ、リグルも来てたんだ」
「寒いし風は強いしで大変だったわ」
服についた雪を払いながら上がり込む。
外は相変わらず吹雪いているようで、戸を開けた瞬間冷気が待ち構えていたかのように玄関から廊下へと駆け抜ける。久しぶりに浴びた冷たさに身を縮ませながら、戸と鍵を閉め一言。
「なんでチルノもボロボロなのよ」
「来る途中にメイドを見かけたから、勝負したのよ」
「他にも誰かボロボロなの?」
「私が来たとき橙がそうだったわ」
襖を開け、部屋へと入る。ルーミアは自身の湯呑みをお盆から拾い上げ、炬燵へ足を伸ばす。それとは対照的に熱気にチルノは眉をひそめ、暑そうに手で扇ぎその場で座り込む。
四人がけの小さな炬燵はとうとう満席となり、襖付近で比較的ヒンヤリと冷えた壁にもたれかかる一人。何時もの場所に収まり、各々普段通り自由に時間を使っていく。
みかんやお茶を暖めたり、凍らせたりしながら口にし。ごろごろと過ごす彼女等、何もやる気が湧かずただただ時折会話を挟みつつ寝返りをうつ。そんな中、絨毯の敷かれていない床で、同じように寝転ぶチルノが不意に何かを思いついたように起き上がる。
その様子に近くで横になっていた、リグルとルーミアが気付き声を掛ける。
「どうかしたの?」
「なにか欲しいなら取るよ、みかん? それともお茶?」
「ねぇ、かくれんぼしない?」
「「「……かくれんぼ?」」」
炬燵の陰で隠れていた二人も気付く。
向こう側で横になるのをやめ、橙とミスティアも起き上がり話に参加する。
「そう、かくれんぼ。ごろごろするのはもう飽きたのよ!」
「いいわね、そういう遊びは久しぶりだし。でも、何処でやるの~?」
「何処でもいいわ」
「じゃあ、私はこの家の中とかがいいな。外寒いし」
「リグルは、そんな寒さをしのげない軽装だから駄目駄目。あたいはこの家でも構わないよ!」
「何が駄目駄目なのよ……。それにチルノじゃなくて、橙に聞いたんだけど」
「ああ、そうなの」
無言でいたルーミアも肯定派なのか、四人の視線が橙を見る。視線を天井に移し、少しだけ考え頷く。
「いいよ、でも負けないからね」
「じゃあ決まり。なら、えーっと、誰が――――」

「かくれんぼの鬼と呼ばれたあたいは最強よ」
「「「……チルノ鬼ね」」」
「あ……あれ？」
「ほらほら、鬼は目を瞑る」
「え、あたいが鬼やるの？」
「鬼はー黒～福もー黒～♪　もんどうむようでまっくらね～♪」
「あ、ちょっとミスティア！」
両腕を上下左右に動かし、手探り状態で「見えない！」と叫ぶ。
ミスティアは、その様子を見とどけ、いそいそと炬燵の中に隠れようとして何かとぶつかる。何かと思い見てみると全員が同じことを考えていたのか、他の三人と視線が交差する。
熱線が直接当たりあまりにも熱いため、橙がスイッチをオフにした。互いに苦笑いを浮かべつつ、詰め合って隠れる。
「もーいーかい！」
その言葉に答えるよう、チルノの視界に光が戻る。
部屋をキョロキョロと見渡した後、ここにいないと判断したのか直ぐ様部屋を飛び出した。廊下をドタドタと走り、襖や障子を開けては閉め、開けては閉めと家中を駆け巡る。物をどけてから見るということを思いつかないのか、あっという間に全ての部屋を見渡し元の部屋へと戻ってくる。うーん？　と、疑問符を浮かべて唸りながら「何処だろう」と、呟く声に笑いを堪える四人。
気付かないまま、うろうろして悩んでいたが、暫くして動きを止め再び部屋の外へと飛び出す。
遠ざかる足音を聞きながら、狭い空間で笑顔を向ける。
これほど上手くいくとは誰一人思っていなかった。そもそも寒さから逃げるために一番都合がいいと思い、炬燵の中に隠れたのである。隠れる側の勝つ方法を決めていないが、勝ったと思い込み声を出しかけたその時。
ガラガラと、玄関から戸を開けるような音が聞こえ。もう一度ガラガラと、戸を閉めるような音が聞こえる。四人の顔から笑顔は消え、驚きと少しの焦りを混ぜたような表情へと変化する。
慌てて毛布を退かし、外へと飛び出すが既に部屋には誰もいない。玄関へと向かい鍵を確認すると閉めたはずだが開いている。靴があることに何故気付かないのかと毒づき、四人は鬼を探しに戸を開け家から飛び出した。
「はあ、やっぱり何処にもいない……」
二階部分に相当する、以前は蚕棚や物置として使われていた場所からふわふわと腕を組んで降りてくる。
戸を開けてから靴が有ることに気付き、外にはいないと思ったのと同時に、まだ探していない場所が真上にあると思い出した彼女は直ぐ様行動に移った。その時鍵を掛ければよかったのだが、忘れてしまった。
しかし、探してみてもそこにも誰も隠れていなかった。部屋に戻ろうとするが戸が少し開いていたため、疑問に思いつつも閉めようと近付く。そして、先程まで置かれていた靴が消えているのを視界の隅で捉え全てを理解した。
彼女も外へと飛び出し、全速力で空へと飛び上がった。

（終）

〈作者コメント〉
お久しぶりな如月翔です。テーマが妖々夢ということで、合わせてみました。前回の紅魔郷では書ききれず、その後時間を取ることができず先月号も間に合わず…投稿できませんでした。話は変わりますが現在も地震による影響がツイッターや掲示板等でも続いていますが、人による二次災害を少しでも減らせるようにしたいです。こういう時だからこそ…ね。

この長く続く冬の中・・・
よし
あとは持って帰るだけだ
寒がっていた
幽香を助けるべく
奮闘していた

・・・大人しく渡していれば
獄界剣
「二百由旬の一閃」
ザッ
怪我をせずに済んだものを

ゴォォウ
なっ・・・
早い！

り
ポウ

あらあら
虫一匹に本気出しちゃって
風見・・・幽香

あなたも私の邪魔を？
スッ
貴方達がやってる事に興味はないわ

この子は

連れて帰るわ

ん・・・あ
あ・・・
起きた
ゆっ
幽香さんっ！
バァッ
ああ・・・
五月蝿い
ガバ
どっ
どうして！
あんな
冗談を真に
受けて
まったく
無理する
んだから
ボフ
すみません
幽香さん
後で
お仕置きね
え？

ああ、いたいた
おいしいしらたま
この蟲で最後ね
斑

や…面目ない…
桜点にまさかこの様な弊害があったとは
まぁ、最近解った事だし

春の生き物の生育に良いと言われ、広く使われていた桜点だが
劇的な効果のため、樹木の体力低下を招き、病気や蟲がつき易くなる事が判明した

バンバン撒いてました…
適量使うなら問題無いんだけどね
さかせ
ましょー

幽々子様など三食かかさず振りかけてます
それは怖いなぁ！
ごっはんがごっはんが
すっすむちゃん

人体(？)影響は
よく解ってないけど
控えた方が良い
だろうね

リリーに
なっちゃうかも

六ボス
から
中ボス
とか…

えっと…
じゃあもう
行くね？

それはかなり
困る!!

あ

？

ちょっと
お時間あります？

おぉ・・・

とろぉ

すっごいキラキラしてる…
最近は冥界桜を見物に来る方が増えてましてね
ぱたぱた
うん
この白玉餡蜜を売り出そうと思っているのですが
うん！

お礼もかねて良ければ御賞味頂ければと
うん!!

…甘いもの好きなんですか？
うん！
あーー！

酷いわ妖夢っ！
私に内緒でそんな美味そげな物をっ

幽々子様…お昼食べたばかりでしょう
甘いものは別腹っ

胃は一つでしょうが！
牛さんは四つあるわっ！

ほほう我が主は牛でしたか!? 牛に仕えてましたか 私は！ 魂魄家はっ！
もにゅ
牛さんを差別しないで！ すっごく美味しいのに!!
もにゅ

うま～
うま～

ずるいー
ずるいーー!!
じった
食ーべーるーのーー!
喰ーらーうーのーー!!
ばった

はぁ…
ちょっとお待ち
下さい今…
いやっ!!
はっ

ここでお出ししたら
より一層幽々子様の
春っぷりがダダ上り
の鰻登りッッ
もむ
もむ
ぐっ
よんだーー?
今日は心を鬼にして
でもNOと言える
魂魄妖夢にならねば
!!

いけま
せんっ!!
黙認してきましたが
桜点ご飯も禁止です
からねっ!!
これ以上食っちゃ
寝率が上昇すれば、
ザコ妖精まで身を
落しちゃい
ますよ!!
みょーん

がーん
…そ、
そんな…

そんなこと言うの妖夢じゃないわっ！
みょんよっ!!
いいもん！この美味そげなバスケットの中身喰らい尽くしてやるもの!!
あ、ちょっ、それはっ！
リグルさんちゃんと見てて下さいよ！
ひぃぃぃ

ってこの幸せ面だぁ――ッッ!!
喜んでくれるはいいけど空気読んでぇ――ッ!!
まう
まう

ふふふ、バスケットにはおいしいパンとワインって相場が決まってるものよ
おもむろに桜点をブチ撒けて何言ってんですかぁ――ッ!!
ざら
ざら
春

それに入ってるのは蟲ですってば――!!
へっ!?
うぁ

ぺかっ
あらー？

は…
蜂…？
「コスカシバ」と言うそうです
蜂にも見えますが蛾の仲間ですよ
桃や桜の幹を食害するまぁ、害虫ですね。
もっとも少数なら深刻な害はありません
ドドド
数が少ない内にリグルさんが顕界の老木や枯木に移動させてくれる手筈でした
…手筈だったんです
ガタガタブルブル
チャキッ

フリダシどころか
悪化したじゃない
ですか―――!!
そこら中に
卵産み付けますよ
きっと―――!!
くわっ
よ、よ～む～…？
話せば
わか…
ガタ
ガタ
ガタ
ガタ
ガタ
斬らねば
解らぬっっ!!
いやぁぁぁぁ
ぁぁぁぁ!!
ご馳走様っ！
空ッ
すごく
美味しかったよ
妖夢…
ってあらら？
ひら
ひら
何で
大人に？
切りつぶすみょん
切りつぶすみょん
この後一週間程かけて
卵を回収したそうです

幽々子様ー
食事の準備ができましたよー
遅いわよ妖夢
プラ
あんまり待たすから王子がカエルになっちゃったわよ
あーじゃあ次はカエルがヘビですね
東方茶湾虫クロツク
わあい
今日はスペシャルメニウですよ
えっとですね
ごはんと
おみそしる
おつけもの
あと…

リグル
いただきまーす
パク
ぎゃあぁあぁあぁあぁあ！
ひでぇ！
ムシャバキ
ゴッジュゴッジュ
モンガモンガ
今までで一番ひでぇ！
あたまが
なくなった
じゃないか！
ていうか
生きてた！
まぁ頭なくても
動く虫とかいるものね
超きめぇ
ぶっふぅ
喰っといて
アンタはさぁ！

冗談よ
冗談ですむか！
すっ
?
実はお願いがあるのよ
プゥ
これを見て
西行妖
何かが封印され
けして満開になることのない
桜の樹よ
時を待っても…
春を集めても封印を解く
ことができなかった
あなたにはこの樹に
何が封印されているのか
調べてほしいの
いつも木にくっついては
防衛本能で臭い汁
とばすんでしょう?
ほら、早くしないと
アナタの頭消化しちゃうわ
うあぁ！すでに
嫌な音してるぅ！
分かったよ！
調べるからちゃんと
頭かえしてよね！
超トイレ行きたいわ
急ぐから
我慢してよ！
この人幽霊じゃない！
悪魔だ！

パラ
すっきりりんこ
トイレ
やりやがった！
一コマも我慢してねぇ！
JoJo
あら…
もし私が流していないとしたら…
それはそれでちくしょう！
つづく！
続くかっ！投げっ放しにもほどがあるぞ！
ねぇ、もし
な、が、し、て、なー
ゴゴゴ
こいつらどこまでもウゼぇ！

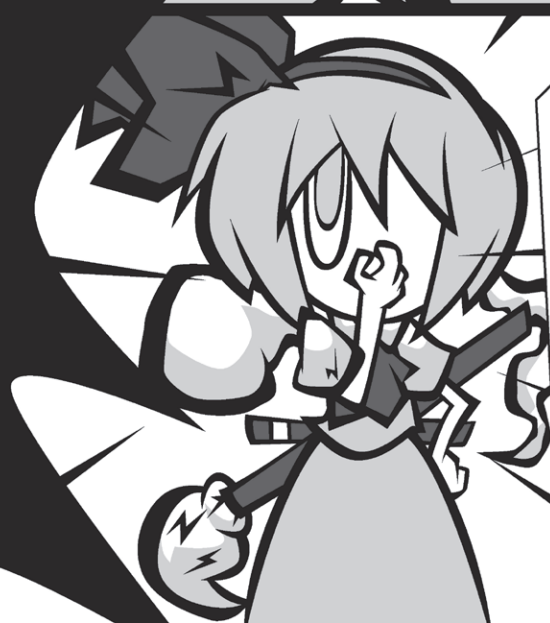
ほら、かえすわ

え？

ありがとう
西行妖のことももういいわ

それともまだ
手足がジャマかしら？

この人
誰よりもこわい！

プラ

まぁ正直食えたもんじゃないから
すぐ吐いたのよね

おもしろいかなと思って
少しからかってたんだけど
そんなにおもしろくなかった

そして
誰よりもひどい！

幽々子様
ばっちいのですぐに
アルコール消毒を

あとバルサンたくので
すぐに抗菌室へ！

わたし何しに
来たの！？

ぶーん
美しさで
人を惑わせるのが
桜の罪
でも咲くだけの桜に
罪は無い
罪も穢れも知らない
あの子でも桜の秘密は
分からなかったか
おわり

ハア
カラ
カラ
…っ
くそっ
この…
バケモノ
め…
西行寺
幽々子！
リグル
妖々を
行く
preludenano

くっ
てぇい！
バッ
ガッ
ロロ
まったく…
ダメじゃない
カラン
カラン

パイは食べるものよ
弾幕(おもちゃ)にしてはいけません

パクッ

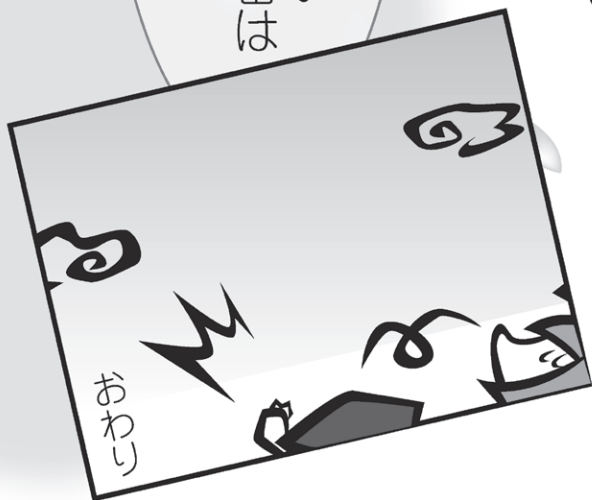
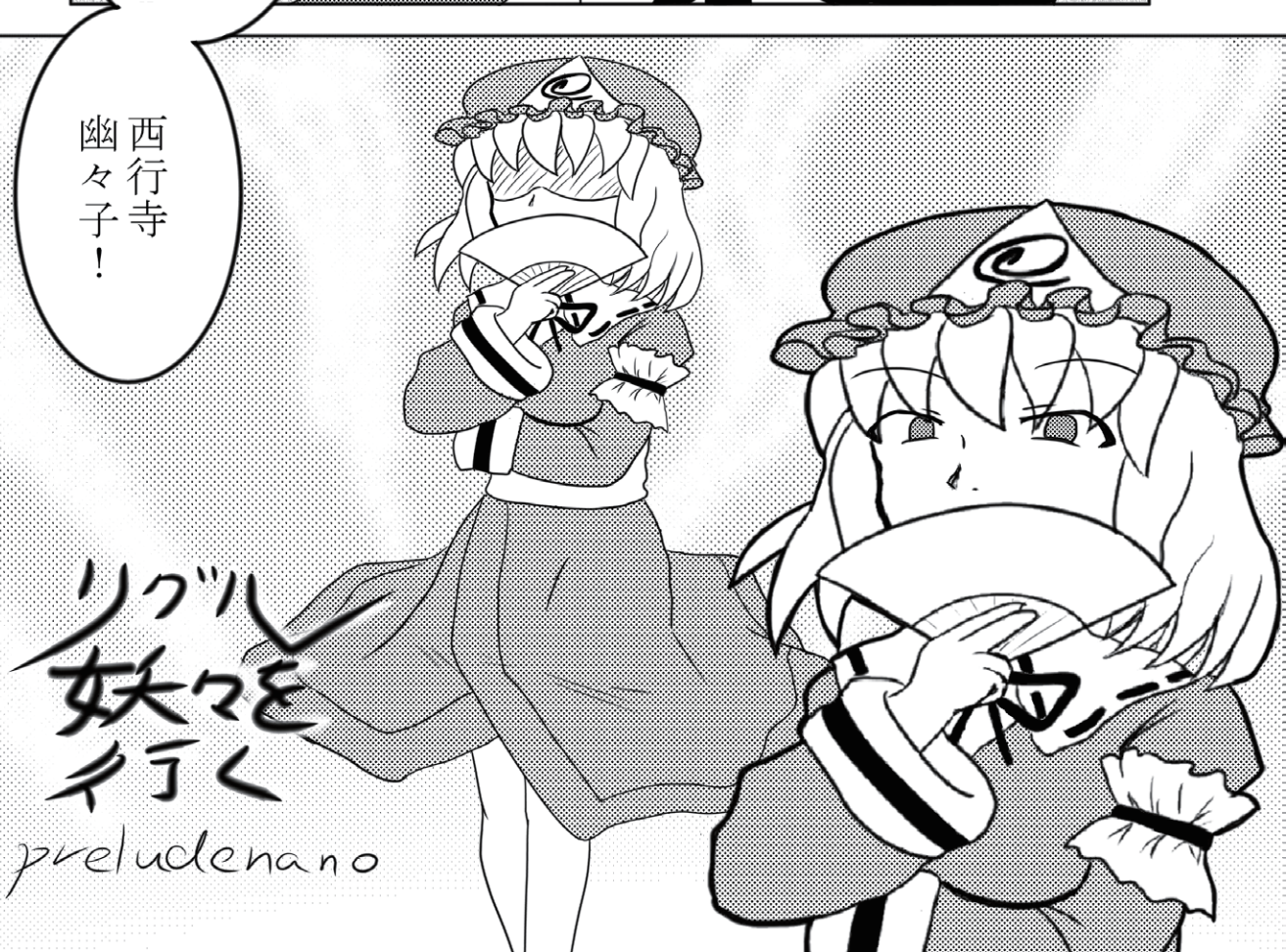
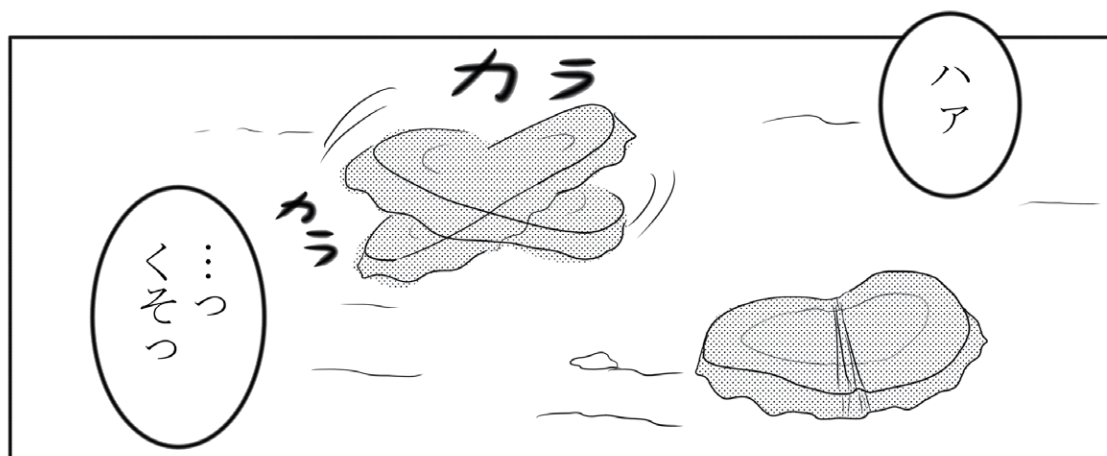
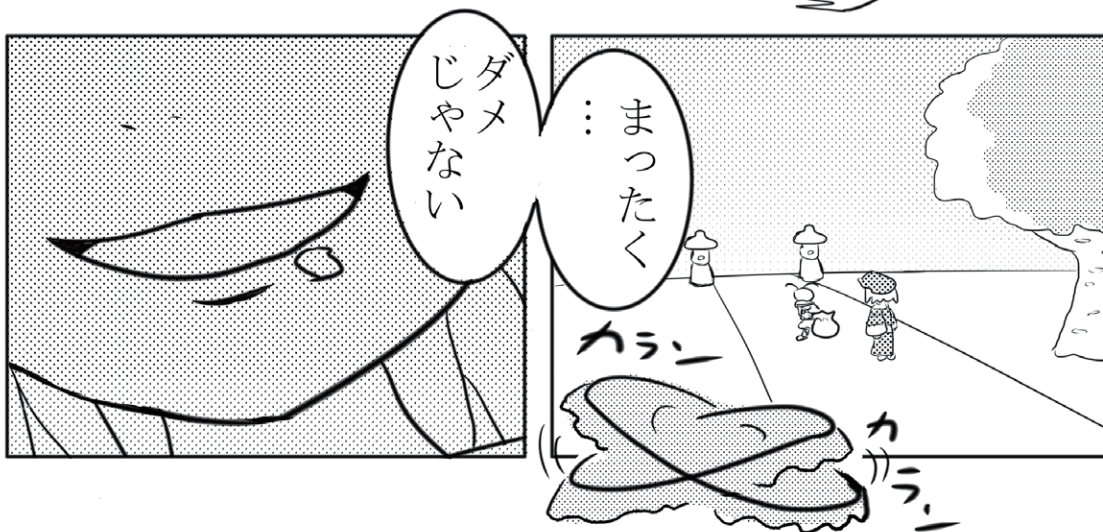
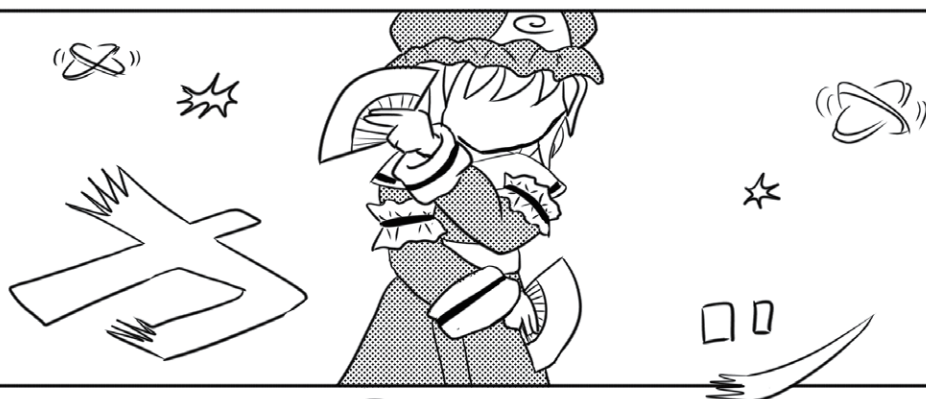
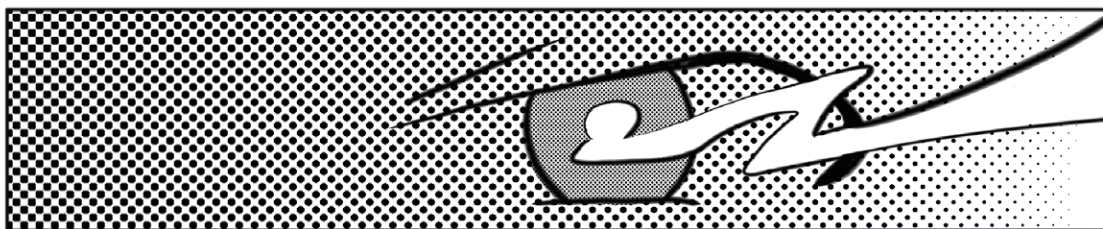
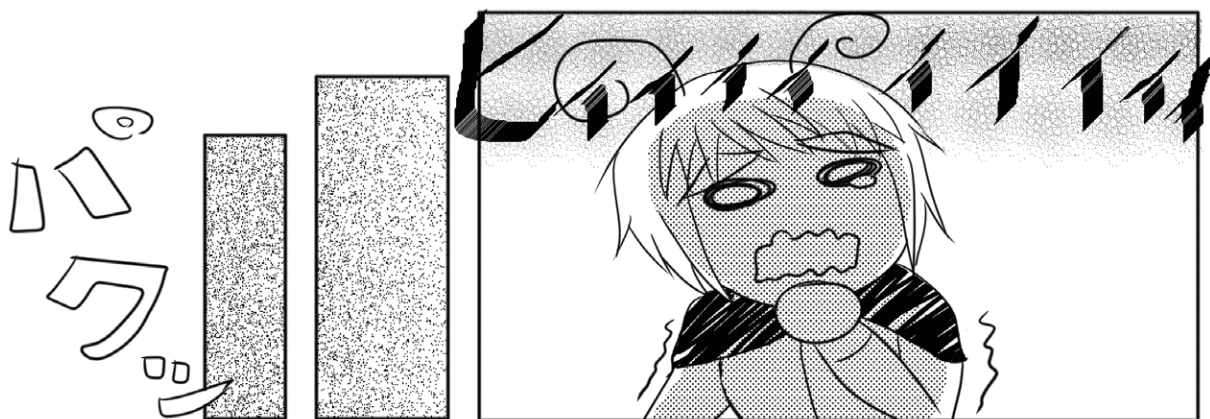
ひぃぃぃぃぃぃぃ

ええ、
ムリでした
勝てっこない

誰だよ
パイ投げで白玉楼を
攻め落とすって
言った奴…
オマエヤ!!

fin.

〜蛍妖々夢〜

描いたひと: 怒羅悪

難易度ルナティック

春雪異変の冒険を
リグルがした場合

始まらない

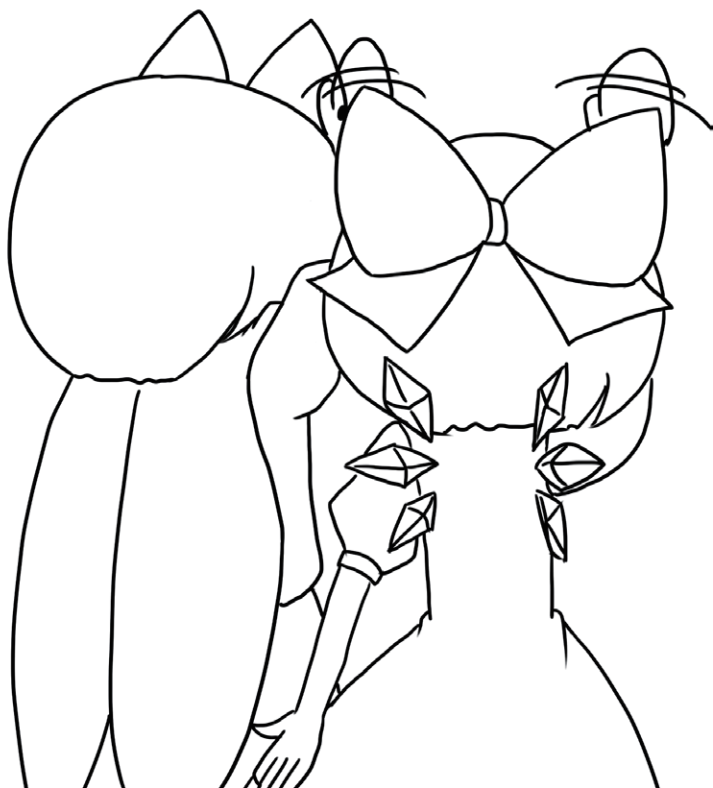
最初で最後のステージ

前ページとの関係なさ。

楽屋ウラ的何か。

描いた人 草加あおい

また来年。

蟲カゴ

～ Compensation to fantasy ～

著者：悠奈

〈あらすじ〉リグルを自身の中で守る為、殺そうとした幽香の前に現れた妹紅。妹紅とリグルによって幽香はリグルの中で安らかに眠った。

　あれから一夜が過ぎた。花畑から離れて再び人里へと降りて行った。人里には人、妖怪の気配は全くなかった。今は誰も居ない民家を借りて、私達は休んだ。そして今朝、私の横では妹紅さんが静かな寝息を立てて眠っている。今ならば裏切られる前に関係を絶つ事も出来た。でも、私はそれをしなかった。きっと、何処か胸の奥で誰かを信じていたかったのだろう。私は民家を出て、人里の通りに出た。普段ならばきっと賑わいを見せていたであろうその通りは、とても静かだった。ただ独りの妖怪が立っているだけだった。朝日はそんな事を知ってか知らずか、明るく輝いていた。

　私は近くにあった水桶から水を拝借し、顔を洗う。冷たい水が頭をスッキリさせてくれる。ふとその時、水面に映る自分の顔が見えた。私は、そこ居た人物が自分の顔をした別の誰かのような錯覚を受けた。私は水を手ですくって、その人物に投げつけた。その人物の顔をがゆらゆらと揺れたのを見て、私は水桶から離れた。

　先程まで寝ていた民家を見ると、妹紅さんが起きて背伸びしている様子が見えた。だから私は駆け足で民家の中へと戻った。

◇

　夢を見ていた。私が小さな頃の夢。未だ寿命を持っていた頃の夢。

　私は父を慕っていた。ずっと父の背中を見ていた。娘として父が好きだった。だが、一人の女によって父は大恥をかかされ、面目をつぶされた。

　私は女を憎んだ。ある日、女の残した薬が最も月に近い山で燃やされると噂を聞いた。私はそれを奪い、女に仕返しをしようとした。そして、その薬を盗み、飲んだ。

　その時から私は寿命が無くなった。家族は私を置いて逝き、周囲は老けない私を忌み嫌った。私は山奥で独りになった。

　ただ、私を理解してくれる人も居た。彼女は半獣半人だった。冷たく当たる私にも優しく世話を焼いてくれた。感謝の言葉も言わないのに、常に笑顔で私に接してくれた親友。私は彼女に出会って、独りの辛さを知った。私の日常に日が射した。

　そんなある日、偶然迷い込んだ竹林で例の女と出会った。私はすぐにそいつを殺した。しかし、死ななかった。次に私は殺されていた。だが、私も死ななかった。暫くそいつと殺し合った。

　今でも憎んでいた。だが、そいつは居なくなった。私がこの手で消してしまった。憎い

存在だったが、私の気持ちをわかってくれる数少ない友だと気がついた時、彼女は居なかった。
　その翌日、私は大切なモノを失い、狂ってしまった親友を殺めた。その時誓った。私はこの異変の主犯をブン殴るって。友の為にも……。
　私は布団から這い出て家の外を見る。そこにはちっぽけな妖怪が立っていた。友を殺めた夜に出会った妖怪。彼女もまた、友の為に戦うという。目的が共通している私達は協力している。それに、彼女は非好戦的だ。一緒に居て安心できる。
　小さな少女は昨日、その背には合わぬ重たい想いを背負った。目を離したらその重さに潰れてしまいそうな少女。私はそんな少女を守ってやりたい。そう思った。

◇

「おはようございます。妹紅さん。」
　妹紅にパタパタと近づいて軽く頭を下げるリグル。
「ああ、おはようリグル。」
　寝起きで跳ねた髪を手でかきながら答える妹紅。
「……もう、大丈夫か?」
　妹紅がリグルの眼を見て小声で尋ねる。リグルは少しうつむき、妹紅から眼をそらす。
　そして、一度ギュッと目をつぶり、妹紅を真っ直ぐ見つめる。
「大丈夫です。こんな異変早く解決して、元の日常に戻しましょう!」
「うむ。その意気だ。」
　妹紅はわしゃわしゃとリグルの頭を撫でる。リグルはくすぐったそうに笑った。
(そして、チルノと仲直りしなくちゃ……)
「ま、とは言っても手掛かりがなくちゃあなぁ……まぁた適当に探索するしかないかなぁ」
　リグルから手を離し、腕を組んで首を傾けて難しそうな顔をする妹紅。
「そうですよねぇ……。フランドールから逃げてからは行き当たりばったりで幽香さんの所について……ああなっちゃいましたし……」
　最後に声が細くなったリグルを心配そうに見つめる妹紅。その視線に気付いたリグルはすぐに笑顔になり、大丈夫。と伝える。
「あ、そういえば、どうして妹紅さんは幽香さんの所に来たんですか?」
　雰囲気がこれ以上暗くなるのを防ごうとリグルが話題を変える。
「ん?あー。いや、フランドールと正面から衝突したら、相打ちの危険があったもんだから、隙をついて逃げて、歩いてたら強力な妖気を感じて行ってみたら、丁度幽香がリグルを殺そうとしてたのを見つけたんだ。」
「そうですか……」
「どうかしたのか?」
「あ、いえ。何か手掛かりがあって、私達の元に来たのなら、これから何処に行けばいいかわかるかもって勝手に思ってしまいまして……」
「……」
(不安なんだ。これからどうなるか全く見当もつかない。何時殺されてしまうかもわからないし、自分が再び誰かを殺めてしまうかもしれない。だから何か頼れる手掛かりのようなものが欲しかったんだな……)
　妹紅は黙ってリグルをぎゅっと抱きしめる。
「な、何を……」
　いきなりの出来事でリグルは混乱する。
「大丈夫だ。私が守る。」
　妹紅はリグルの耳元で力強く囁いた。
「……はい。」
　その声に勇気付けられ、リグルは少し肩が軽くなった感覚がした。しばらく妹紅はリグルを力強く抱きしめて、離れた。
「ま、なんにせよ行動あるのみだ!」
　そう言って妹紅は民家を出て太陽の光を全身に浴びる。心地よさそうに背伸びをする姿をリグルは見つめる。
(慧音さんを失って自分も辛いはずなのに……ありがとうございます。)
　リグルは借りさせてもらった家に頭を下げて家を出た。

◇

昼過ぎ、人里を出て森の中を歩いていた妹紅の足が止まる。それを見てリグルは不思議そうな顔をして立ち止まる。
「どうかしました？」
「……」
妹紅はキョロキョロと辺りを見渡す。
「そこにいるの。出てこい！」
妹紅は足元に落ちちた石を拾い上げて茂みに投げつける。ガサッと音がした後、何かが動く影が見えた。
「……レティさん。」
そこには妖怪、レティ・ホワイトロックの姿があった。
「……何の用だ。」
妹紅がリグルを庇うように立ち、レティに問う。
「……貴女に用は無いわ。あるのは、リグル。貴女よ。」
「……」
妹紅が黙ってリグルの前に立ち、身構える。その様子を見てレティが少し笑う。
「そう恐い顔しないで。私自身はリグルに用は無いわ。あるのは、リグルのお友達よ。」
「……」
リグルは何も言わない。レティの言っている人に思い当たる人がいるからだ。それは会いたいと思っている、と同時に怖くて会えない人だった。
「私はその子に頼まれて貴女を呼びに来ているだけ。リグル。来るの？来ないの？」
「……リグル」
妹紅が構えを解いてリグルを見る。リグルは暫く黙って考えた後、ゆっくりレティに歩みよって首を縦に振った。
「ふふっ。ついてきなさい。」
レティは振りむいて歩きだす。二人はそれに黙ってついていった。
（やっと会える。これで間違いを正す事が出来て嬉しいはずなのに……なんでだろう。会うのが凄く怖い。会ってはいけない気がする。でも……誤解、解かなくちゃ。）
リグルは考えながら歩いていて、自分が今何処を歩いているのかすらわからなかった。気がつけば、レティの歩みは止まっていて、見覚えのある湖の畔に居た。
湖には、湖を見つめている小さな影があった。後ろ姿で顔まではわからないが、リグルはそれが誰なのかすぐにわかった。
「……チルノ。」
リグルが知っている中で、背中に氷の羽を持っている妖精は一人しかいなかった。その影は紛れもなくチルノだった。宴会の翌日、異変の起こった朝に出会った友人。リグルが何よりも会いたいと思っていた友人。話しをして、仲直りしたいと思っていた友人。その友人がリグルの声を聞いて振りむいた。
「……」
チルノは黙ってリグルを見る。見つめられてリグルはビクッと震える。チルノの雰囲気が以前と大幅に違っていたからだ。以前のようにおだやかではなく、突き刺すような鋭さを持っていた。
リグルは動けず冷や汗をかいていた。話しを出来る雰囲気ではない。チルノからひしひしと伝わってくる憎悪の感情。
チルノがゆっくりとリグルに近寄る。リグルは何も言わず動かない。その間にリグルとチルノとの距離がどんどん縮まる。普通に歩いているはずなのにリグルには長い時間に感じられた。リグルはぎゅっと拳を握り、必死に口を動かす。
「チ、チルノッ！」
リグルがそう言った瞬間辺りに乾いた音が響いた。そしてリグルは何時の間にか横を向いていた。
「……えっ？」
リグルが左の頬に熱を感じる。だんだんそれが痛みにへと変わってくる。そして気がつく。自分が平手で叩かれたという事に。
「どうして……」
チルノが口が小さく震える。
「どうして、みすちーを……」
「ち、チルノ！あれはちが——」
「煩い！」
チルノがリグルを突き飛ばす。思いっきり突き飛ばされたリグルは尻もちをついて倒れる。
妹紅が心配して近寄ろうとするとレティが

手で制する。
「……」
　妹紅はレティを睨んで、立ち止まった。
「……許さない！」
　チルノは奥歯を噛みしめてリグルの首元を掴んで、立ちあがらせる。
「チルノ……」
　リグルが名前を呼んだ瞬間、今度は拳でチルノがリグルを殴る。リグルの口からは衝撃でぐっと声が漏れる。
「あんたは許さない。あたいが……あたいがぶったおす！」
　チルノの手から氷柱が現れる。それをリグルの腹にむかってふりかぶる。
「リグルっ！」
　妹紅が動くが、その手をレティに掴まれて動けない。
「てめぇ……」
　妹紅が振りかえり、睨む。レティは一切動じない。
　リグルは、手を伸ばして氷柱を掴む。チルノはぐっと力を込めて突き刺そうとする。
「チルノォォ！」
　リグルが叫びながら氷柱を掴んだ手に力を込める。リグルの手が白く光る。その瞬間氷柱が粉々に砕け散る。それに驚いたチルノの一瞬の隙を逃さず、チルノの頬を殴る。チルノは与えられた力に逆らえず、地面にたたきつけられる。
「リグルゥゥ！」
　チルノは立ち上がり、リグルに突進する。
　妹紅はリグルの様子を見て安心する。それと同時に腕を掴んでいるレティの力が強まる。
「ふふ。貴女の相手はこっちじゃなくて？」
　妹紅を握る手に力が増す。
「……おもしれぇ」
　妹紅は握られた手に力を込める。二人は笑いながら睨み合う。
「うらぁ！」
　妹紅が握られた手振りはらう。レティはサッと手を離して距離をとる。
「さぁ、かかってきな！」
　妹紅の誘いにレティは乗らず、動かない。
「……ふふ。真っ向に戦っても私一人じゃ到底貴女には敵わないわよね。」
　レティがそう言うと後ろの茂みから一人の小さな妖怪が現れる。
「二対一で行かせてもらうよー。」
　金髪に小さなリボンをつけて、黒い服を着た妖怪はのんきな声で話す。
「……上等だぁ！」
「行くわよ！ルーミア」
「りょうかいーー！」
　昼の湖で二つの影と、三つの影がぶつかりあった。

◇

「止めてよ！チルノ！話しを聞いて！」
「煩い！煩い！うるさぁい！」
　チルノは楼観剣を振りまわす。リグルはチルノの攻撃を避けたり受け止めている。
「私はやってない！ミスティアは――」
「黙れぇ！！」
　リグルの言う事にチルノは一切聞く耳を持たない。
（どうしても、話しは聞いてくれないのか……なら）
　リグルはチルノから距離をとって構え直す。チルノもリグルが自分の間合いから離れてしまったので、構え直す。
「適度に吹っ飛ばして動けないようにする！」
　リグルは自分の中に眠る魂達の力を使う。リグルの足元が光り、チルノとの距離が一瞬で縮まり、リグルの間合いにチルノが動く。一瞬の出来事で何が起こったわからず混乱しているチルノをリグルは白く光った右手で殴る。地底の鬼の力で殴られたチルノは吹き飛ぶが、空中で受け身をとり、素早く体勢を立て直す。チルノは空気中の氷を凍らせてリグルに向かって飛ばす。リグルは素早くそれを避けようとする。しかし、避けている途中でチルノが奇跡の力で風を起こし氷の軌道を変える。リグルは避けようとするが、いくつかの氷に当たってしまう。
　チルノはさまざまな攻撃でリグルを攻める。
　リグルも様々な方法で避けながら、攻撃へ

と転じる機会を狙っている。
二人の少女が湖の岬でぶつかりあう。
一人は友との仲のため
一人は友の裏切りのため
何度も白く発光する。他の人達の力を借りながら戦う。
　彼女たちは一人で戦えないというわけではない。ただ、他の人の力を借りれば有利になる。一人では出来なくても支えあえば成功することもある。友とはその支える存在。
　その友と戦う彼女たちは何を思い、何を感じているのであろうか。
　友に誤解された少女
　友に裏切られた少女
　戦い、触れ合う中で互いの気持ち、想いが伝わる。攻撃ひとつひとつにその想いを託して戦う。お互い疲労しても戦う。想いを乗せて。

◇

「宴会ってしてる最中は楽しいのに、終わったらあっと言う間でつまらないなー。」
　神社での宴会の帰り道、チルノは一人つぶやきながら歩いていた。
「それにしても、相変わらずみすちーは一人歌って、リグルはそれ聞いててあたいの相手してくれないもんなー。ルーミアは料理ばっか食べてるしー」
　文句を言いながらもチルノは嬉しそうな顔をしている。
「また宴会したいなー。」
　そう呟いた時、チルノ意識が一瞬切れたかと思うと、身体に違和感を覚えていた。
「……？あれ？」
　キョロキョロと見渡す、身体に変化もなければ周りに変化も無い。
「？？？」
　空から周りを見ようと空を飛ぼうとするが、空が飛べない事に気が付く。
「こ、これは！異変ってやつね！巫女が解決する前にあたいが解決してやる！」
　新しい玩具をもらった子供のようにうきうきしながらチルノはかけ足で仲間を探しに行く。その時
「――！？」
　チルノは目撃した。リグルの眼の前でミスティアが自ら包丁を突き刺して死んでいたところを。
　衝撃の出来事に呆然と立ち尽くすチルノ。リグルがチルノの姿に気づいた時、チルノは何も考えず逃げ出していた。
　気が付いたら後ろにリグルは見えず、ただ一人、湖の前でぼーっとしていた。
　チルノは自分でもよくわからない感覚に襲われていた。ただ一つ確かなのは、くやしいことだった。自分の友人が友人を守る事が出来ない事に。この怒りを友人にぶつけるのは間違っている。でも、おさえる事なんて出来ない。
　チルノは決意した。もっともっと力をつけて、リグルと喧嘩して、思いを聞こうと。そして、一緒に異変を解決して、みすちーの仇を取ろうと。

◇

　陽は沈んでいた。月明かりの下、チルノは地面に倒れていた。その前にリグルが立っていた。
「チルノ……聞いて、私は――」
「知ってる。」
　リグルの声を遮ってチルノは言う。
「知ってる。みすちーを殺したのがあんたじゃないってことも知ってる。」
　その言葉を聞いてリグルは驚き、怒った声で聞いた。
「だったらなんで――！」
「なんでだろう。くやしかったのはわかるんだけど……自分でもよくわかんない。あたい、馬鹿だから……」
　チルノの眼から涙が流れる。リグルは何も言わずチルノを抱き起こす。
「あたい……みすちーが眼の前で死ぬの見て、頭が真っ白になって、どうしようもない怒りに襲われて。それをリグルにぶつけちゃいけないのわかってんのに。ぶつけちゃって……」
「もういい……もういいよチルノ……」
　リグルがぎゅっと抱きしめる。

「ごめん……リグル。」
「私もミスティアを守れないでごめん……」
　その様子を三人は離れた所で見守っていた。
「……これでいいのか？」
　妹紅がレティに問う。レティは二人の方を向いたまま答える。
「ええ、こうするのが私の目的だったし。」
「……計算通りってわけか。」
「それは違うわ。私は、二人を信じていたのよ。」
　レティが妹紅を見て笑う。その笑いには先程の笑みとは全く違っていた。
「仲直り出来たら、後は異変解決に移らなくちゃ。異変が解決して元通りになる保証はないけど、可能性はゼロではない。私はそう考えているわ。」
「……そうか。」
　すべてが上手く行った。誰もがそう思った。その瞬間、赤く鋭い光が妹紅の前を横切った。
「かはっ……」
　光が見えた次の瞬間、ルーミアの声が聞こえた。一瞬の出来事で、脳に命令が届くのに時間がかかった。妹紅は顔をルーミアの方へ動かす。先程までルーミアが居た場所にルーミアの姿は無く、少し離れた木にルーミアは居た。その身体には先程見えた赤い光が突き刺さり、ルーミアはだらりと全身の力が抜けていた。
「ルー……ミア？」
　レティもようやくそれに気付き、震えた声を出す。
「リグルっ！チルノ！」
　チルノがリグルより早く事態に気づき、顔をあげる。その目線の先には何か赤いものが高速でこちらに向かってきているのが見えた。
「リグルッ！危ない！」
　咄嗟にリグルの身体を横に突き放す。リグルは何が起こったのかわからず為すがままに突き飛ばされ、地面に倒れた。
　次の瞬間、チルノの胸に赤い光の棒が突き刺さり、そのまま赤い光の勢いに押され、遠くに飛ばされる。
　チルノの眼に友の姿が映る。驚愕の表情でこちらを見る友人にニカッと笑うと、チルノの視界に霞がかかり、何も見えなくなった。
　チルノは笑顔のまま動かなくなった。
「チ、チルノッ！？」
　リグルが叫ぶ。叫んでチルノに歩みよる。
「チルノ！チルノ！」
　チルノの身体を揺する。しかし、反応は無い。
「そんな……そんな……」
「リグルっ！危ねぇ！」
　妹紅がリグルに飛びかかり、リグルを抱きかかえて転ぶ。次の瞬間に、リグルの居た場所に赤い光が飛んできた。
「あ……ああ……」
　リグルがガタガタと震える。
「しっかりしろ！落ち着け！」
　妹紅が肩を力強くもち、語りかける。
　妹紅達に近寄る足音が聞こえる。妹紅は足音のする方を見る。
「……フランドール」
　そこには小さな金髪の女の子が無邪気な笑みを浮かべてこちらを見つめていた。
「遊ぼっ。」
　チルノとルーミアの身体が白い球になり、フランドールに向かって飛んでいった。
「ああ……あぁ……」
　リグルは球に手を伸ばすが、球に届かず宙をかく。無情にも球はフランドールに吸収された。
「チ、チルノ！」
　レティが驚愕と焦りの顔をして叫び、フランドールにとびかかった。
「ば、馬鹿！やめ——」
　妹紅が声で制しようとしたが、既に遅く、フランドールとの距離を縮めていた。
「うあぁぁぁ！」
　レティが寒気を操り、温度を下げる。空気中の水を凍らせてそれらを飛ばす。小さな球を何個も何個もフランドールに向けて飛ばす。フランドールがそれを受け止めている隙に近寄って殴った。
「だぁっ！」
　フランドールはレティの手を掴む。
「くっ！」

レティはフランドールの力に苦痛の声を漏らす。
「どかーん」
フランドールが楽しそうに言う。次の瞬間に、フランドールに掴まれていたレティの手が破裂した。
「な、なんだありゃ!?」
フランドールの能力を目の当たりにして妹紅は驚いた。
「ぐっ、あああぁぁ!?」
激痛に顔を歪めながらレティは後ろへ引き、再び雪のつぶてを飛ばした。フランドールはポケットの中から八角形の箱を取り出して、レティに向ける。
「あ、あれは魔理沙の!レティさん、逃げて!」
リグルがそう叫ぶ。レティはリグルの言うとおりに逃げようとしたが、行動に出た時にはフランドールの方から飛んだ真っ白な光に包まれてしまった。
「な……何が……」
妹紅は激しい光と音でクラクラする頭を押さえながら何が起こったかを把握しようとしていた。
「……レティさん」
レティが居た場所にレティの姿は無く、白い球が浮かんでいた。
月の下、一人の少女が狂った笑みを浮かべて、二人の少女を見つめていた。

◆

「……頃合いね。」
女性が呟く。傍で一糸まとわず眠っていた少女はその声で眼を覚まし、眠たそうに眼をこする。
「じゃあ、後は任せていいのね?」
「ええ」
女性は少女の質問に眼を合わさず答える。
「本当にあんたの言ったこと信用していいのね?」
「ええ」
相変わらず眼を会わせず、遠くを見ながら答える。
「……そう。じゃあ、やりなさい。」
少女は立ち上がり、裸のまま女性の前に立つ。女性は少女の左胸に手を当てる。
「……」
女性が何かを呟くと、少女は全身の力が抜け、その場に崩れ落ちた。
「幻想郷を……任せたわよ。」
少女はそう呟くと動かなくなった。
「勿論ですわ。私は幻想郷を愛していますもの。」
女性はそう言うと、少女に口づけをして立ち上がる。
「……悲しい運命ね。」
女性は日傘をさして、椅子に座って遠くに居る少女たちを眺めていた。

（つづく）

〈作者コメント〉
人は支えあって生きていく。互いに仲良くしたり、ぶつかり合える友が居る事は大切な事です。次回、NITHTBUG 最終号。劇に幕が降ります。

旅人

著者：くろと

彼女は闇に蠢き、人身を糧としていた。そこに偶然通りかかった私を、どうにも喰いたいらしい。「腹が減っているのか？」と聞くと、「たぶんね」と彼女はにっこりと笑った。その口からは生えかけの八重歯を覗かせている。なるほど。と私は納得を示して、それから彼女に交換条件を提示する。「道案内をしてくれるのなら、喰われてやってもいい」私の提案に彼女は眼を輝かせた。「ほんとっ？　ウソつかない？」彼女の言葉に、私はにやりと笑った。「たぶんな」妖怪一匹連れ立っての珍道中である。

彼女の名前はリグル・ナイトバグ。蛍の妖怪らしい。「それで、道案内も満足に出来ないリグル・ナイトバグ。この先をどっちに進むんだ？」軽口に私が問うと、リグルは小首を傾げて、腕を組んだ。しかし、返答は無かった。道中は暗中模索、つまりは迷っていた。リグルの方向感覚すら、迷いの竹林では無意味だったのだ。「どうするんだ、リグル・ナイトバグ。これでは喰わせてやれないな」私は肩を落とした。その言葉を聴いた、蛍の彼女、リグルはむぅっと頬を張り、それから指をぱちんと鳴らす。「よし、妹紅に聞いてみよう」と解決の策を呟くのだ。私は、もう一度、肩を落としたのだ。結局、一日さまよってから、妹紅が住むあばら家に到着した。

妹紅の案内は的確であり、明確であり、そして幸先があるものだった。僅かな時間で、私たちは竹林を外へと抜けたのだ。リグルは妹紅に礼を述べてから、「そろそろ食べてもいいかな？」と私に満開の笑みで喋ってくるのだ。私は彼女の額を弾き、「まだお預けだな。さあ次に案内してくれ」と舌先を出してみる。すると、リグルは頬を膨らませて、ぷいっとそっぽを向いて、次なる土地へと案内するのである。

私たちは湖の中心にある小島を目指していた。幸い、リグルは人間一人分を乗せて飛ぶ程度の、能力は持っていた。小島の岬には血のように紅い屋敷があり、そこへと不当な手続きで侵入を済ませていた。「ところでリグル・ナイトバグ。もしかしなくても、この友達は危険なんじゃないか？」と私は耳打ちしてみると、彼女は「この子は、誰の友達でも危ないよ？」と答えるのだ。その友達、吸血鬼の少女、フランドールは、回廊を逃げ回る私たちを面白がるように追いかけて、華美な弾幕を花咲かせていた。その様に私は感嘆を漏らしつつ、あるいはリグルが反撃の狼煙を挙げるのである。そうやって館中を逃げ惑いながらも、リグルは私に笑顔を向けて「もう食べてもいいよね？」と囁くのである。私は首を横に振って、「割に合わないな」と、簡潔に却下した。

妖怪の山、その山頂の守矢神社で御神籤を引いてみると、引いたのは『凶』であった。お祓いのために手間を掛けていると、早苗という巫女らしき風祝が、目聡くリグルを見つけたのである。「さすがは妖怪、リグル・ナイトバグ。凶の原因はそっちか」私は溜め息を吐いた。早苗という少女は、妖怪退治、と息巻いて連呼しながら、執拗に弾幕を張って追い詰めてくるのだ。もはや諦観したようにリグルが「ねえ、食べたいんだけど？」と、問いただしてきた。勿論、「ありえないな」と答えておいた。

地底は意外と明るく、それでも薄暗かった。私とリグルが訊ねたのは地霊殿、そこで持て成しを受けてはいたが、飼い猫が私を狙っていたのは明白だった。「なあ、リグル・ナイトバグ。そちらに案内を頼んだのは、気のせいだったと思いたくなってきた」襲い来る飼い猫の爪を避けながら、私が愚痴ると、リグルは「今のうちはね」と首を横に振ったのだ。張り巡らされる弾幕は、苛烈さを増し

ていった。
　やがて、「ここが……」私は目的地に辿り着いたのだ。その土地の名は、「白玉楼」であり、私は感動に打ち震えていた。そしてリグルは、空腹にうな垂れ、腹の虫を鳴らせていた。リグルは上目に私を見て、「もう、いいでしょ？」と懇願するように言うのである。そうだな。と私は納得をした。すでに道案内という目的は達せられているからだ。だから、「いいぞ」と私は頷いた。聞くや、リグルは会心の笑みで、それを喜んだ。私は、とうに天寿を全うしていた身体を脱ぎ捨てて、この屋敷の主人に挨拶へと向かうのである。

（終）

〈作者コメント〉
※コメントはありません

Ash like snow（前）

著者：もやし

目覚めたのは深い森の闇の中だった。
目元にまで伸びた髪がくすっぐたく、夜風が素肌にあたり寒い。
右手を見つめると、そこにあるのは赤とも黄色とも形容しがたい肌の色が映り、５本の指が中指を基点に山なりに生えている。朦朧とした意識の中、何度か握り離してを繰り返すうちに意識が明確になり蛍であった頃の自分よりも融通のきく肉体に好奇心を抱き始めた。
妖怪へと――蟲たちを統べる王へとなった私。
どうして私だったのか。きっと具体的な意味などない、先代の蟲を統べし妖怪が死に新しい王が必要となっただから選ばれた。他の蛍たちより長生きしたから、その程度のものだろう。人も妖怪も、世界などそれほど曖昧なものだ。
考えてもしかたがない、肌寒さと空腹感が体を支配している今、衣服もしくは食べ物を手に入れなければ生きることはできない。座っていた身体を無理に立ちあがらせる。初めての行為で神経の伝達がうまくできないのか、はたまた自分の脳が慣れていないだけか、どちらにしても立ち上がるのに木を支えとする必要があった。
あたりを見回す。暗く淀んで全方位見えるのは草木が少し見えるだけで残りは黒。
両足だけで歩くにはまだ時間がかかりそうなので支えがあるのはうれしいが、何処へと向かえば良いのか？方位さえも分からない状態でどこへ向かうというのか。
不安感に支配された体は自然と空へと顔を向けさせた。
星。生い茂った葉に隠され、ぽつりぽつりとしか見えないけど幾千の星が輝いている。
見上げた空に一か所完全なる闇があることに気付いた。
初めはほんの小さな闇だった空間が瞬く間に広がる。それは不完全な闇だ。広がるにつれ現れたのは闇の中にひとつ、またひとつ私を見つめる紫色の瞳。そして闇と空を分かつ二本の境界を結ぶ赤いリボン。
どちらも異質な光景だが――幻想的。不可思議な光景に魅せられる。
「ようやくお目覚めのようね、蟲の王」
広がる闇の中、一人の少女が姿を現す。
紫と白、明暗はっきりと分かれたドレスのような豪勢さのある衣装。
腰までとどきそうなウェーブのかかったブロンドの髪。
白い素肌に微笑を浮かべた表情。
「誰？」
怖いという感情よりも私のことを知っていることが気になる好奇心、そして敵意のない彼女の視線への安心感から出た言葉だ。
「私はあなたの道しるべ。名乗るほどの者ではありません」
「頼まれた？」
「そう、昔の蟲の王からね」

「昔の蟲の王・・・?」
ええ、と少女は首肯する。
「私はあなたの目覚めを待っていた。蟲の王は幻想郷の成立と共に生まれた妖の一つ。幻想郷の賢者である私はずっと見つめ続けてきた、何代も何代も王の継承を、王の為すことを。それが幻想郷の理として」
私はまだ王ではない中途半端な妖だということか。
惑い。期待。喜び。自分のことなのに自分の心が定まらない。
左足が震える。長く立ちすぎたせいか、武者震いか。
ただの蛍、特別なもの何一つ持たない蛍が妖怪になり蟲を統べる立場となってよいのか・・・

――――浮かび上がったのは一つの幻想だった――――
かつて、1匹の蟲でしかなかった頃のこと。人も妖怪もめったに寄り付かない森の深層にある小さな湖。
無数の光が舞う。
その中の一つだった私。
夜の帳の下りた空の下、光を発し空を舞う。
蛍の飛び回る中、一人の妖怪が湖の上に立っている。
何か言葉を発しているが蛍の私にはわからない。それでも、妖怪がこの小さな蟲の世界を描き出していることは分かった。
一糸まとわぬ四肢は細く、なめらかなラインを形成していて、背中に生えた羽は黒く、マントのようにしなやかでさながら魔法使いだ。
飛び回ることも忘れて、貴やかな姿に目を奪われていると――――目があった。
私たちの発する光、水面から反射した光に照らされ影と明るさがどこか艶めかしい。
長い髪の合間から見える大きな二つの瞳。髪と同じ緑の眼球。
綺麗だ。自然と浮かんだ思い。
その思いが伝わったのか妖怪は笑い、私へと手を差し伸べる。
白い腕。折れてしまいそうに細い。
弓なりに曲げた唇を開き、一つの言葉を告げた――――

明確な幻想。
記憶にない映像。
どうして
こんな過去、私の記憶にない。
あれがかつての王なのか。
彼女には私を王とする意思があったのか。
混乱する思考。すべては幻想であり幻想は現へと収束する。
私にはあるのか、数日前まで同じ存在であった蟲たちを支配する側へと回る覚悟と責任が。
今は不安しかない。それでもやらなければならない。
分かっている。所詮自分も弱いことは。だけど守らねばならない、みんなも弱いから生きるために。
「…私は、蟲の王として生きるわ」
紫の少女はみせたのは驚きと納得の入り混じった表情。
「いいでしょう。ここに貴公が蟲の王として幻想郷の輪廻のなか生きていくことを誓おう」

世界は一変した。
浮かびあがった光たち。
赤く、白く、青く。
輝くのは命の光。
蟲の、木々の。
これが王の見てきた視点。
静かで心細いと思った、この森に多くの命が輝いていたなんて。
何匹かの蟲が私へと近づいてくる。
光が広がり、私を包む。
それは服となり靴となり羽となる。
私だけではないみんなの力。
ありがとう
私のために。

幻想郷の賢者はいつの間にか姿を消していた。
お礼をいう時間がなかったな。
悲しいがこの出会いが最後ではないのは分かっている。
彼女はこの世界を見つめ続けている。なら再び会えることはあるだろう。
だから私は生きよう、みんなと共に広大な幻想郷の中の一人の妖怪として。

（続く）

［あとがき］
はじめましての人は始めまして。
アカシックレコードによって今号に私が寄稿することを知っていた方はこんにちは。ツイッターやピクシブで「こいつ見たことあるぞ！」と思われる方もいらっしゃるかもしれません。
もやしです。
４月になってひと段落したら毎号機皇しようと思ってましたが来月号で休刊という事でいてもたってもいられず、小崎さんおよび月リグに投稿したすべての方々へ二年分の感謝をこめて書きました。
締切前二日程で書いたので続きものとなってしまいました、後半はこれからかきます。
また文章を書きなれない身なので拙い文章で読み苦しくて申し訳ありません。
クロージングも何も考えない男なので複線のようなのは何も考えてませんあしからず。
後半はゆかりんVSリグルとか昔の話とか入れて強引に物語の体裁を成せればいいなとひとまず考えています。
では、後期に落ちて来年ワンチャンとかにならなければ来月号でお会いしましょう。
表題はブリグリの同名楽曲から取らせていただきました。また本文内容にも多大な影響を受けております。

〈作者コメント〉
　最後に、ここまで読んでいただいた方、小崎さん、月リグ投稿の皆さん、またリグルたち可愛らしいキャラクターを生み出して頂いたＺＵＮさんに感謝を述べます。ありがとうございます。

『 フリフリグル 』　残虐非道の貴公子

最近古明地姉妹が気に入ってきたので。フリルは最近知り合った人の影響です(*´ω`*)

『 無題 』　夜騎士

ホワイトデーのお返しをこっそりばれないように作ろうとしてて、「見つかっちゃった！」的な絵を描いたらこんな感じになりました。

リグルーペ

描いた人:羅外

お客さん来ませんねー
うん……いや、そのシャボン玉のストロー商品なんだけど

香霖堂ってカードも売っているんですね
ゴヨウガーディアン?
人の話を聞いて!

これ知ってます!虫メガネ!虫を見るためのメガネです!
話を……

これ霖之助さんにプレゼントします♪
いや、だから商品……

これでずっと私だけを見ていてくださいね♪

はい……

そこの君っ
また電気を
つけっぱで
寝落ちかい？
いまどき節電も
できない野郎は
女の子に モテないゾっ！

穴埋めという使命を負って、このページだけ 月刊ナイトウナギ

3月のウナギ

3月大ウナギ

あとがきを書けばすむ話だったと気がつきました。ありがとう、そして一月先にさらば！月刊ナイトウナギ。

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

リグルは人気者
黒ストスキー　*p2*

食欲的な意味ではないはず。多分

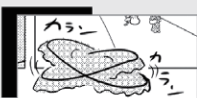
無題
非常識　*22p～24p*

なんでこんな漫画になったのだろう・・・

おいしいしらたま
斑　*25p～32p*

食害系の蛾や蝶の類は、成虫の形が面白かったりするのが多いですね。
シャチホコみたいだったり色々と。。
そして幼虫のあの本能に来るような奇抜な配色はなんなのかと思います。

東方茶湾虫
クロツク　*33p～38p*

今回は何言っていいか分かんないですね

リグル妖々を行く
preudenano　*39p～41p*

リグル：「投げるパイを大量に作ってたら、最近お菓子作りが
　　　　得意になった気がする」

ほたりぐる～東方妖々夢～
怒羅悪　*42p～43p*

こんばんわ、どらおです。寒さに弱い点をフルに出してみました（
話は変わり、地震について、自分が住んでいる長野でも強めの地震が
ありましたが、ワタシの住んでいるところは大きな被害は無さそうです。
被災地の皆様の無事を願っております。

無題
草加あおい　*44p～45p*

みょん自機おめでとう！　妖々夢ではなかなか倒せない壁として
立ちはだかるので使う前に倒して涙目にしてやりたいですね
（ここは月刊ナイトバグのコメント欄です）

リグルーペ
羅外　*60p*

お久しぶりです。

無題
言示弄　*61p*

できる野郎でもモテない可能性があります。
その場合、下記の原因が考えられます。
A：何かが足りない　B：なにかが満ち溢れすぎている　C：※

表紙/ナカイくん
小崎

人生ゲーム(ウナギ版)最後の勝負！　サイコロを振って……
1,2,3が出たら→蒲焼きエンディングへ
4,5,6が出たら→白焼きエンディングへ
最終号もよろしくおねがいします。

月刊ナイトバグ最終5月号は4月22日（金）発行予定！

※最終号の投稿締切は4月22日(金)です。
皆様からの投稿をお待ちしています。

月刊NIGHTBUG　2011年4月号

2011年3月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画
web配布／自由投稿参加型月刊誌

○（仮名）
如月翔
くろと
もやし
悠奈
言示弄
黒ストスキー
残虐非道の貴公子
夜騎士
羅外
ADDA
キッカ
みなも
貴キ
蛍光流動
preudenano
クロツク
草加あおい
怒羅悪
斑
非常識
小崎